

資料  
『屋良朝苗日誌』

## 本資料について

本資料は沖縄県公文書館所蔵『屋良朝苗日誌』（手書き）から本論文に関連する部分を中心に文字起こししたものである。本資料の活字化については管見の限り「一条の光—『屋良朝苗日記』に見る復帰—」（『琉球新報』にて連載中）にて一部されているのみである。

読みやすさを考慮して、原則として旧字体は新字体に、かな混じりの熟語は漢字に、一部の漢数字は算用数字にし、適宜句読点を補っている。また、本文中の注は〔 〕（きっこう括弧）で表した。判読不明文字は●とした。

脚注については主に以下を参照した。『屋良朝苗回顧録』（朝日新聞社、1977年）、『沖縄大百科事典』（沖縄タイムス社、1985年）、『聞蔵Ⅱビジュアル（朝日新聞オンライン記事データベース）』、『ヨミダス歴史館（読売新聞オンライン記事データベース）』。

## 【1953年—戦災校舎復興募金運動—】

『屋良朝苗日誌 001』

1953年1月20日（火）よい天気

あわただしい思いをしながら、彦坊<sup>1</sup>や昭ちゃん<sup>2</sup>ことに後髪ひかれる思いに苦しみながら公私を明らかにして悲壮な決意をして出発する。今日までに事務局並びに同志諸君の骨折りや激励に対しよい決意を新たにした。目的を達しなければ死んでも帰って行けないのである。4時5分出発。アイフェル講習<sup>3</sup>の軍用機とはちがって大分気が楽であった。途中は沖縄の島も何処が何処やら見当はつかなかった。間もなく雲の上に出て視界は只重畳せる雲と青空ばかりである。8時30分着陸。階段を降りると屋良さんはいませんかとの呼声。毎日新聞の写真班撮影が先ず意表外の事。

崎間君が屋良さんと呼んでくれる。船越さん糸嶺篤志さんが迎えに来て下さっている。安心した。荷物を受取って直ぐ船越さんのご案内で毎日新聞社に行く。東京本社社会部記者堀利貞さんと対談した。質問にも色々答えた中に船越さんが加わって必要以上に補っているので変な記事にならねばよいがと心配している。とにかく新聞にインタビューしたことは全く予想外であった。11時前になって解放。やなぎ旅館に案内して貰う。呉我君前田さん等も見えて居られる。全く東京に来た感じは受けない。愈々深慮遠謀をめぐらし運動に乗出すことである。1時か2時頃入浴して床につく。東京の一夜沖縄位の寒さであった。よくねむれた。

1月21日（水）晴

〔略〕午後は崎間君呉我君と一所に総理府の南方連絡事務局<sup>4</sup>に吉田君<sup>5</sup>を訪問。吉田君重大な発言をした。しかし吉田君は余り樂觀論者の様な気がしてならない。教育の日本直轄の具体化の件だ。局長にも御会いした。大変よい方だ。胸襟を開いて親身に話してもらえる人又話せる方である。教育の直轄は大分有望の様であるがさてどうなるか。そこに来合わせた城間情報局長、瀬長君と一所になる。城間氏は吉田君の態度からするこの懇談の空気からはらち外におかれて気の毒であった。吉田君の言、屋良先生は与党にはあきたらず文教局長をかけた云々。又先生は何処でも非常に期待を以て迎えられる云々は僕としてはいささか困った事だと思う。局長に御別れしてアジヤ第五課長鈴木孝氏に教育の日本直轄の方について外交交渉を強く打ち出してくれる様要請。続いて第一課長小島太作氏に同じこ

<sup>1</sup> 和彦（五男）。このとき病床にあった。

<sup>2</sup> 昭子（長女）。

<sup>3</sup> 全国規模で行われた戦後初期の教育指導者講習会。沖縄からは1950年に12名が福岡に派遣され、屋良もその一員であった。

<sup>4</sup> 1952年設置。サンフランシスコ講和条約によって米施政権下に置かれることになった沖縄のほか、小笠原諸島らとの事務手続きを取り扱った。

<sup>5</sup> 吉田嗣延（1910-89）。戦前は沖縄県社会教育主事として標準語励行を主張。1956年からは南方同胞援護会事務局長。復帰後は同会を引き継いだ財団法人沖縄協会の専務理事を務めた。

とを要請。引続き条約局長に強く同じ様なことを要請する。下田武<sup>マツ</sup>二<sup>ニ</sup>氏正に日も暮れかかるまでの接<sup>マツ</sup>衝<sup>マツ</sup>であつた。今日は予期しない大活躍であつたが今後は恐らくこれに倍する機会が必ず与え恵まれる事と信じている。とかく幸先よろしいと喜ぶ。

夜は呉我君を訪ねて来ていた大里君にしばらく会う。間もなく豊田氏吉田氏、久場氏新崎博士来訪、懇談す。やはり吉田君は希望的観測が多い様だ。自己礼讃が多い様に思う。吉田君の発言で衆院の文部委員会に出席する様な事になるかも知れない。やるぞ。矢でも鉄砲でも最早絶対に辞せないぞ。

吉田君は帰りに外務省の計画が只軍に教育法規を日本と一致させる程度の事を仰々しく云われる。それ位の事なら何も外務省の外交接<sup>マツ</sup>衝<sup>マツ</sup>を待たなくても自体でも解決できぬことはない。日本法規と同一法規を使用する事はアメリカも別に反対ではないのである。標準が余りに低い。その位でぬか喜びしては何もならない。要警戒。

1月22日(木)

総理府に吉田君を訪問す。石井局長に会い各県知事への紹介依頼状を御願ひす。文部省に調査局長、国際文化課長、管理局長、政務次官に御挨拶、学校援護会に訪問。大浜先生<sup>6</sup>、本川先生に御挨拶をする。旅館に帰ってから平良氏、仲吉良光<sup>7</sup>氏等来訪。復帰熱を一段と高くあふり、決起大会の主意書宣言決議文を皆に配る。仲吉氏平良氏それを大いに利用されるとの事であつた。それから日教組へのメッセージを読んで批判を乞うたが皆が一大感激、平良氏も何かの材料にされる為もらって行かれる。かくて晩10時半頃東京発高知に向う。日教組の吉川さんが案内して下さい。何処を見ても何処を歩いても誰に会うてもさ程の感激もわかず25年上京の時とは大分変つて来た。汽車は急行の特別2等指定席でこれは大変楽であつた。夜も熟睡ではなかつたがねむれたと思うた。

<sup>マツ</sup>2月23日(金)晴

〔略〕7時15分、高知つく。日教組の係りの親切の御案内で旅館に入る。吉本旅館で全くの別荘見たような立派なこつた旅館である。沖縄からすれば全く人生のオワシスだ。大島の高元君が一足先に来て居て旅館で落合つた。東京より寒い様だ。山城正一氏が世話して下さい。駅に下車してから旅館に入るまで係の日教組、又高知教祖の各位の親切なる御世話には只只感謝あるのみ。

<sup>マツ</sup>2月24日(土)晴

天気が晴れたせいか大変冷えた。9時から文化委員長会議に出席した。各県もれなく定刻には参集していた。講師団も遅刻なく流石に真剣な雰囲気は場に充ちていた。和田議長の

---

<sup>6</sup> 大浜信泉(1891-1976)か。早稲田大学総長、南方同胞援護会会長、沖縄問題等懇談会座長などを歴任。佐藤政権による沖縄返還で大きな役割を果たす。

<sup>7</sup> 仲吉良光(1887-1974)。ジャーナリスト、首里市長。終戦直後から日本復帰を主張した。

挨拶の後、岡委員長<sup>8</sup>の挨拶があったが流石に貫禄を示していた。和田議長は頭の明敏さがかげえわれ声、態度、流石で敬服した。それに各県の委員長の意見は全く無駄がなく立派で流石に一県を代表している者だけある。それに比較して沖縄の教員の貧困さは只只淋しさあるのみ。和田議長の紹介で一、二分間挨拶をのべた。〔略〕

1月25日（日）晴

8時半頃会場に出かけた。もう一般席は超満員であった。沖縄、大島も正会員席が準備されていた事は感謝であった。半時間おくれて9時半開会。その時には参会者は場の内外を埋めつくし5,000名は下らなかつたと思う。プログラムは次々と進み待望のメッセージの時間迫る。力を込めて上る事なく朗読して行った。3分乃至5分位と云って居た<sup>ママ</sup>自分等のメッセージは特に全文読まして貰った。感謝にたえない。拍手も二回猛烈に送られた。会場はかたずをのんで皆聞いていたと思った。〔略〕

八分科会は平和と生産の教育の実践的展開と題するものであったが皆真剣に質問していた。しかしあのような研究会なら沖縄にも出来そうである。しかし思い切って政府を攻撃する如き言動は今の所沖縄では出来ない。〔略〕

1月26日（月）晴

〔略〕本夕高知教職員有志主催の懇談会があつて出席する事になっていたが何でも共産党だとの事で日教組の山城正一氏等が親切に注意して呉れたので行かない事にした。有りがたい事であった。〔略〕

1月28日（水）

〔略〕会途中仲松君の知り合い埼玉県代表の一女教師からの緊急動議が起り沖縄奄美大島の血の叫びをそのまま放置出来ぬ、慰問対策を講ずべきであるとの事に万場拍手で賛成。処理委員において方法を決定する事になる。仲松君等の一言一行がかくの如き結果を生む。運動とはこんなものであろう。

会議中に沖縄の代表に面会人が多かつた。それは見も知らぬ人々からの慰問激励の為であった。ああ有りがたい。血は水より濃しとでも云いましょうか。〔略〕

1月29日（木）晴

〔略〕ひめゆりの塔を見た。泣かされた。ああ乙女等ヨシ子よ、何といたましい事だろう。ああ、あの純情、至純な行為これを無にしてはいけない。無にはしてはいけない。高知でひめゆりの塔を見るか。乙女等の冥福を祈る。

---

<sup>8</sup> 岡三郎（1914-1999）。日本教職員組合委員長、日本官公庁労働組合協議会、参議院議員などを歴任。

2月3日（火）晴

7時59分東京到着。高里氏に迎えられ構内食堂で朝食をとり、案内されて沖縄財団訪問。名詞の印刷世話を貰い、学援事務所に訪ねはじめての内からの便りを受ける。彦坊ちゃんの尿量は然程少くはない。しかし蛋白は少くはない。しかし元気との事。急にはよくはないのだろう。彦坊ちゃん御父さんは坊の快方を神仏に祈って居るよ。しかし約束の御本を今日まで送れなかったのは御めんなさいね。昭ちゃんも肩がこるとは。しかし頑張っていて呉れよ。子供なくしては御父さんはないよ。惨めな沖縄の人々の為に父は命をかけているのだ。皆が元気で力を合わせていなければ命を捨てるにも捨て得ないぞ。朝夫君<sup>9</sup>も大事にして父の代り頑張ってくれなければねー。香川県の教育長の示唆を得て全国教育長会議に御願いに上る。虎穴に入らずんば虎子を得ず。勇を鼓して御願いする。日もくれる頃、若葉荘に投宿。大城氏はじめ左傾分子と云われている連中来訪。しかし今度の目的だけは話しておく。余り過激な事は自分には話してはいなかった。外間君が記事にするのだろう。メモして居た。全国運動は沖縄新聞に記してよいかどうかは疑問である。軍を刺激する事になりはしないかと気になる。しかし私はあくまで軍に協力する事によってのみ沖縄の将来は開けないと信じてるのでその点は天地神明にちかかって悔いがないと思っている。只日本の一地方として米国によりよく協力したいのだ。〔略〕

大きなニュースを書き落としている。今日後三時頃、九段の都道府県会館で全国教育長会議があったのでそれに出かけて歴史的メッセージを送る。アルバム、新聞、太平洋の孤児を配る。はじめはぼかんとしていたが最後は大拍手であった。幹事長が協力の答辞があった。香川の教育長の世話で鹿児島県の教育長に紹介してもらったが鹿児島県の教育長は出来る丈この機会をつくらぬようにしたいと云う風であった。心臓を強くして行ったわけである。しかし全国教育長に呼びかけたのだから大した収穫であった。

2月6日（金）晴

〔略〕国会の文部常任委員会に傍聴し最後に沖縄教育事情を諮るはずである。はり切り度くもやはり心臓が弱い。命がけの仕事だ。何事もひるんではいけない。出発前に真喜屋先生御訪ね下さる。よい御爺さんだ。何十年振りかな。先生には大変御やっかいになったものだ。ゆっくり御話の出来なかった事は残念。10時前に出発。喜屋武君は先発して傍聴券を貰いに行く。僕はおくれてかの青木さんを訪ねて行く。間もなく入場券を貰い喜屋武君と落ち合い水谷<sup>10</sup>さんの御嬢さんに案内されて第三委員室に行く。議会は今日がはじめ。流石国会議事堂丈に大した威容だ。一人では到底あの金屋は出入出来ない。受け付けで門番が荷物をあずかり二か所の関門を通って行く。傍聴者には何も持たさない。話しの資料も水谷さんの御嬢さんに託して行く。長嶺君が請願書も持参して来る。委員は仲々集まら

<sup>9</sup> 長男。後に琉球大学教授。

<sup>10</sup> 水谷昇（1896-1988）。政治家。文部政務次官として琉球大学創立式典に出席した際に、屋良が沖縄の教育事情を説明、文部大臣への要望書を渡した。

ない。髭の委員長<sup>11</sup>は流石に来ている。一時間位おくれて開会。たった五人位である。

国会ともあるものがあきれた話だ。皆の顔にも真剣味がない。文部省から当局が三、四名、委員会の事務局が数名、速記者が 2 名、後に側面に二、三名居た。傍聴者数名、何処か中学校生徒が四、五〇名は入って来た。開会が宣せられ文部当局の予算らしいもの説明。40 分以上説明が終って一人の土原議員<sup>12</sup>と当局との間に質疑応答。文部省はあくまで腰がにげている様に見えた。

委員会はあっけなく終わった。それより先に水谷さん出席。自分らの事で委員長に耳打ちする。最後に皆を残して水谷さんが写真をと<sup>アツ</sup>って説明さる。約 15 分にわたって自分が熱狂的な説明をぶっぱなした。聞く人も真剣悲壮な顔をしてしんとなっていた。ああ、遂に議会人を動かした。人の真心熱意に感動しない者はいない。正にその通りである。四、五名の議員全くあの校舎の写真を見て憤慨していた。それでこの問題は此のまま聞きすてならぬとしてもう一度正式委員会に証人として呼び、発言は議事録に残すという事であった。

社右の豊田君紹介の議員も自分も取り上げる積りであったと意気まいていた。断じて行えば鬼神もさける。誠意は予想以上の成果を生む。大成果であった。又心臓も出来、自信も出来た。万才、万才だ。[略]

2月7日(土)晴

朝はすすまぬながら高元君と一所に石井南方事務局長の案内で官房副長官に会う。簡単に恩給問題と教育直轄の問題について私が切り出し、高元君も御願した。しかるに僕のルルたる陳情に対し彼は奄美大島の事については吉田総理もたえず気にしてどう進んでいるかと尋ねていると云っていた。癪にさわって沖縄についてはどうなんだと反問したら沖縄の事については問題が余り大きくてと云っていた。けしからん奴だ。名詞も与えて居らない。教育直轄についても話したが彼奴には真実が分らない。だからはじめから気が進まなかったのだ。午前中に辞して帰りしばらく休んで一時に学援に行く。[略]

伊江朝助<sup>13</sup>、神山政良<sup>14</sup>、東恩納寛惇<sup>15</sup>先輩に会う。その他沢田先生がおくれて見えた。三先輩の初めの態度に憤りを感じた。今沖縄で第一線で私が捨身の活動をしていると云うのに彼等から全然積極的に話にふれて来ない。けしからぬ。かかる先輩等が何の仕事が出来るのだ。

しかし時が来て僕が沖縄事情を腹の底からぶっ放した。深刻な顔をして聞いていた。遂

11 伊藤郷一(1901-1987)。「ひげの代議士」と呼ばれた。農林政務次官などを歴任。

12 辻原弘市(1923-1985)か。政治家。日教組部長を経て衆議院議員(左派社会党)。

13 伊江朝助(1881-1957)。政治家。琉球処分期の摂政、伊江朝直の曾孫。戦前の県会議員、県会議長を務めたのち、貴族院補選当選。

14 神山政良(1882-1978)。関東・沖縄県人会会長。東大法学部卒業後、大蔵省入省。オックスフォード大学で4年間留学後、沖縄県振興計画策定に尽力。

15 東恩納寛惇(1882-1963)。歴史家(琉球史)。東京帝国大学文科大学史学科を卒業後、東京都府立高等学校教授、拓殖大学教授などを務める。

に彼等は生き返った。そして沖縄の先輩らしい者に返った。よく分った、これは大変だと云いだした。遂に誠意、熱意、先輩を奮起させた。力になってくれるだろう。新聞を二枚程配る。大仕掛の宣伝に驚いていた。この熱演を国民大会でやらすとか。又東恩納先生は天皇陛下に御目にかかれなかなどと云っていた。〔略〕

2月18日（水）晴

午前11時議会に行く。豊田氏に迎えられて各政党要人に陳情す。先ず社会党右派三輪<sup>16</sup>、富吉<sup>17</sup>、中村<sup>18</sup>各代議士に陳情。続いて松本七郎氏<sup>19</sup>、豊田氏の案内で自由党政務調査会副会長松野頼三氏<sup>20</sup>と会い、そこに文部委員坂田道太代議士<sup>21</sup>も見え、そこで充分懇談。文部委員会の打合わせもし、次に改進黨田中久雄氏<sup>22</sup>に会う。何れも大変同情的好意的であった。〔略〕

2月19日（水）晴

10時に議会に出頭。事務局及豊田氏の世話を依る。定刻より1時間半おくれる。11時半、委員は25名中23名出席、教育委員会法の訂正が野党から出た為に与党も勢揃いしたとの事である。

劈頭沖縄教育の事情説明を求められた。準備の原稿を朗読の形で15分位読んだ。しかし今日は熱がなかった。読む事になるとどうも困る。まずかった。この前の委員会程感銘は見えなかったのではないかと思う。若干質問があったがそれに対する答弁が大変まずかった。例えば教育財政の事情についての答がまずい。教育行政についての軍の干渉に対する質問も愚答。フォスター大佐<sup>23</sup>の言も不備、就職等に対する質問も愚答。要するに無さの場合であったので困った事になった。石井局長からも説明があり、又水谷先生が私の証言を説明して下された。はり切っていたがあっけなくすんでしまった。打ち合わせの必要があったな一。〔略〕

2月22日（月）晴

〔略〕 昼食後直ぐあけぼの婦人会、瀬長加那<sup>24</sup>さんの御宅に上る。〔略〕 瀬長良直氏<sup>24</sup>はき

<sup>16</sup> 三輪寿壮（1894-1956）。弁護士、社会運動家、政治家。左右社会党の統一に尽力。

<sup>17</sup> 富吉榮二（1899-1954）。政治家。元逓信大臣。洞爺湖丸事故に遭い没す。

<sup>18</sup> 中村高一（1891-1981）。弁護士、政治家。元衆議院副議長。

<sup>19</sup> 松本七郎（1911-1990）。政治家。1952年の総選挙では落選。60年安保改定では「安保7人衆」の一人として、岸内閣追及の先頭に立つ。

<sup>20</sup> 松野頼三（1917-2006）。政治家。佐藤内閣では防衛庁長官、農林大臣を歴任。

<sup>21</sup> 坂田道太（1916-2004）。政治家。佐藤内閣では文部大臣を務める。

<sup>22</sup> 田中久雄（1906-1981）。鳩山一郎内閣で防衛政務次官を務める。

<sup>23</sup> ケネス・W・フォスター米国民政府民政官か。

<sup>24</sup> 瀬長良直（1892-1977）。実業家。三越本社常務、二幸専務、相談役を歴任。

れいな貴公子である。何れも多くは初対面である。応接間で広田農林大臣<sup>25</sup>に御挨拶。直ぐ設けられた座敷に通る大臣のとなりで愈々僕が非常的情熱をこめて話をすすめる。卓をたたいて民族の苦悩を訴える。今日も立派な話をしたと思う。色々資料を提供した。比嘉氏<sup>26</sup>から経済問題について若干話す。高嶺さん<sup>27</sup>、瀬長さんのはからいで大臣の意見を確かめようとしたが流石に聞くだけで云わなかった。〔略〕

2月23日（火）晴

〔略〕5時過ぎ千代田倶楽部に記者会談に出かけた。広い所かと思ったら大変せまい所であった。続々つめかけて来た。朝日、毎日、読売、共同通信、日経、時事、東京新聞、NHK各社全部来てくれた。一番勢揃ったのは毎日であった。

烈々たる訴え、今日も要領よく十分に打ち込んだ積り。各新聞社皆筆をとって書き取っていた。高嶺さんからも烈々の御話があった。比嘉さんから経済についてのよい話を訴えた。感銘深く聞いていた。崎浜先生から元旦の日の丸の感激の和歌の披露あり。牧志さんからめずらしくしんみりした話を聞く。途中読売新聞の記者が立ってしばらくして朝日の記者が発言、一所に記事にして手柄争いはしないようにとの提案あり。それから大騒動。読売に電話し止めるべく働いていたが毎日新聞社も書く事になったとかで大変である。新聞社の競争とは恐ろしいもの。かくて話し合いはまとまらずにしまった。効果をそぐ事は残念である。仕方がない。文部省記者倶楽部がよかったかね。〔略〕

2月28日（土）晴

〔略〕共立講堂の国民大会<sup>28</sup>に出席。2000人位出席。議会代表、政党代表の挨拶があったが通り一遍の挨拶で直ぐ帰った。全く誠意はない通り一遍である。又神山さんの御挨拶もあったが切実な熱意は感じられない。はじめから会場は乱れ勝ちであった。議会、政党代表からは何らの希望は見いだせなかった。現地代表として登場。はり切っている積りだったがやはり原稿に依存して話したせい少し低調であった。しかし泣いている人もあったとの事であるから効果があった事と思う。浦崎さんも切実な話もして下さった。沢山の祝電は誠に有りがたい事であった。二百通を突破したとの事。学生、青年等左傾的若人<sup>29</sup>たちの反米反抗的な演舌<sup>30</sup>があつて会場は紛争する。議長も困った事と思う。神山さんも御困りの事と思う。あんな大会には徒らに熱しても仕方がない事。〔略〕

3月1日（日）曇

〔略〕誠心誠意この問題を思いつめている私である。ああ、神よ仏よ沖縄の恵まれざる

<sup>25</sup> 広川弘禅（1902-1967）か。吉田内閣で農林大臣を務めた。

<sup>26</sup> 比嘉良篤（1892-1975）か。三井銀行入行後、三井信託銀行常務取締役、東京急行電鉄取締役、東横映画専務取締役などを務めた。

<sup>27</sup> 高嶺明達（1898-1966）。元商工省総務局長。著書『太平洋の孤児』を本運動で配布。

<sup>28</sup> 神田共立講堂で開催された「沖縄諸島祖国復帰国民大会」のこと。

住民の為にこの度の仕事に栄光あれ。彦坊ちゃんの病気も如何なつたか。やがて地方に出かければ二ヶ月位坊の病気の消息も知られなくなる事は誠にたまらない思いがする。しかし後二ヶ月だ。頑張るのだ。国民的関心を作るまでは帰れないのだ。〔略〕

3月3日(火)晴

〔略〕文部大臣には五藤さん、福田代議士の秘書中山さんの御世話で文部大臣に数分会った。請願書を提出する程度であった。カヤブキ校舎の写真を見てこれが学校かと云って居られた。しっかりやってくれと云っていた。〔略〕

3月6日(金)晴

10時文部省に集合、高嶺さん、船越さん、新崎さん、仲原先生<sup>29</sup>、僕と崎浜先生、久保田調査会長に会って会長候補澁沢敬三氏<sup>31</sup>を推薦。その実現方を乞うた。しかし一応面識ある方から御耳に入れ内意打診してから文部省が接衝するのがよい事となった。外の人は帰った。事務次官に会うべく次官室を訪ねたが不在。丁度そこに剣木元次官<sup>32</sup>が居られたので御挨拶を申し上げた。いくらでも力になってやろうと話して居られた。評議員も承諾して下された。復帰問題について御訪ねしたが、倭島亜細亜局長に聞いた所、話はどんどん進んでいるとの事。それは教育行政権の返却の事のようなのだ。この事は現地軍も賛成して後はアメリカへの接衝あるのみと云っていた。次に完全復帰については教育を戻して、現地の軍事行政に支障がなければ次々と皆戻して行く事になろうと云っていた。仲原先生の御伴をして先ず学芸大学の金城朝永氏<sup>33</sup>に会って事情を話した。昼食を御馳走になって今度は石田と云う人の内に行き岡さん<sup>34</sup>という方の内訪れた。この人は都立大学の先生である。大学の四年の人と卒業生が訪問中であつた。澁沢氏への挨拶を御願ひした所、自分で行くより現地の人並びに沖縄出身の方で一応行って真情を披歴して御願ひして見るがよい、岡氏は側面から話す、自分ではあの人が忙しい人と知っているから直ぐ断られる恐れがあるとの事であつた。そうすれば必ず引受けて下さると思うとの事であつた。喜び勇んで直ぐ比嘉春潮氏<sup>35</sup>訪問。事情を話し協力を求む。物静かな学者らしい人だ。内はささやかな田園の中

<sup>29</sup> 仲原善忠(1890-1964)。沖縄研究者。成城学園高等学校教授などを務める。特に沖縄最古の歌謡集『おもろさうし』の研究で知られる。

<sup>30</sup> 東京で結成された「戦災校舎復興後援会」会長のこと。

<sup>31</sup> 澁沢敬三(1896-1963)。財界人としては横浜正金銀行、第一銀行をへて日本銀行総裁、幣原内閣大蔵大臣を歴任。また民俗学者としても知られ、日本民族学協会会長を務めるなどその発展に大きく貢献した。

<sup>32</sup> 剣木亨弘(1901-1992)か。文部事務次官、官房副長官を経て佐藤内閣では文部大臣を務める。

<sup>33</sup> 金城朝永(1902-1955)。沖縄研究者。琉球方言研究で知られる。

<sup>34</sup> 岡正雄(1898-1982)。民族学者。東京帝国大学卒業後、澁沢敬三の支援でウィーン大学に留学。東京都立大学、明治大学、東京外国語大学などで教鞭をとる。

<sup>35</sup> 比嘉春潮(1883-1977)。沖縄研究者。沖縄で教員を務めながら社会主義へ関心を寄せる。

の住宅だ。それで新宿の志多伯さんの二階で金城さん、比嘉さん、仲原先生と私の四名明日の打合わせをする。金城さんから電話で澁沢邸に照会。明日の 9 時に再度電話との事であった。8 時に新宿駅で落ち合い 9 時頃までには澁沢氏訪問の打合わせをして帰る。〔略〕

3 月 7 日（土）晴

朝食もとらないで 8 時までに新宿駅西入口に行く。既に仲原先生は来ておられた。それから比嘉、金城両氏も見えた。タクシーで澁沢家訪問。既に出かけんとしておられる所を 10 分位御会います。

仲原先生から要用を話し会長を引きうけて下さる事を御願い。一言のもとにことわられた。金城氏からも御願いしたがさっぱり駄目であった。理由は忙しい事と募金対象が文教関係ならば文部大臣の経歴ある人、前田多聞<sup>マツモリ</sup>氏<sup>36</sup>や安部能成<sup>ノボ</sup>氏<sup>37</sup>がよかろうとの事。

私の方から裏情を少々披歴した所、少し態度が変わったが自分の見る所脈はないと見る。懇願して辞去し自分と金城、仲原先生と共に文部省久保田調査局長に報告。しかし大した熱意を示さない。結局今一度金城氏が岡さんをして澁沢氏に交渉依頼を引受け、その結果によって文部省は乗り出すという頼りなさであった。〔略〕

5 時半頃千代田倶楽部に行く。誰も来ていない。間もなく高嶺、大浜、豊田氏等来る。御客は馬鹿におそい。来たのは八時頃か。社会党右派浅沼<sup>アサヌマ</sup>氏<sup>38</sup>外二名、社会党左派一名、都合四名。自由党改進黨は一人も見えない。結局淋しい催しだった。私は復帰問題と教育直結問題を議会で議決する事を要請。請願書を依頼した。今日は懇願の日。感情も高ぶっていたので苦虫をかみ殺した様な顔をしてづけづけ云ったように思う。〔略〕僕の民族に寄せるこの大運動に神よ仏よ恵みを垂れさせ給え。〔略〕

3 月 11 日（水）晴夕小雨

〔略〕高教組に依頼に行く。5 時から岡さん、関さん、望月さんを囲んで会長問題で懇談。同情はして貰ったが結局最後まで僕等に御願いに上るのが得策との事。僕が電話で澁沢先生に御電話して再三御願います事になった。ここに到って僕は悲観した。会長まで自分等が交渉して決めねばならないのか。誰か一人責任を負ってこの問題を解決してくれる先輩在郷<sup>マツモリ</sup>の人が一人位はあってよいはずだ。思いここに到れば情なく愛想がつきる。果たしてこの仕事は目的を達し得るや否や。会長<sup>マツモリ</sup>がはそう急に決められぬと云う。それなら何故半カ年位前●●●●計画があつたにかかわらずこれをこんなに切つぱつまるまで決めずにお

---

上京後は改造社出版部員を務めながら、柳田国男の下で民俗学を学ぶ。

<sup>36</sup> 前田多門（1884-1962）。内務省から朝日新聞論説委員、新潟県知事などを経て、幣原内閣で文部大臣。

<sup>37</sup> 安倍能成（1883-1966）。哲学者。東京帝国大学では夏目漱石の下で学ぶ。京城帝国大学教授などを歴任後、幣原改造内閣で文部大臣。学習院院長。

<sup>38</sup> 浅沼稻次郎（1889-1960）。社会運動家、政治家。社会党書記長を務める。1960 年、日比谷公会堂で右翼少年に暗殺される。

いたのか。道義上の事ながらこの醜体は誰の責任か。云うばかりが能ではない。会長問題の行く方如何に。今日も亦悲観の日だった。

3月14日（土）晴

渡名喜<sup>39</sup>、船越さんに案内されて高松宮殿下訪問。高輪御殿の玄関までタクシーで行く。女中？二人に鄭重に迎えられ持物を玄関側にあずけ応接間に待つ。立派な御殿である。聞けばこの御殿は外国人の交際場として貸して居られるとか。やがて家扶に案内されて殿下の御住居の応接間に行く。庭はとても広大で立派である塵一つない美しさである。案内の家扶は税金が高いため御殿は貸してあると云って居られた。御住居はとても簡素である。普通の人の住居以下である。

中年の女中が玄関に待っていてとも鄭重に招じてくれた。その応接間の質素の事に驚いた。一行で全く一杯になる程度の三坪位の応接間であった。紹介の順序で坐る。私の隣が殿下である。私は殿下と並んで坐ったわけである。間もなく殿下が御出でになる。全く無表情である。渡名喜さんが一行を紹介着席。やがて御茶が運ばれる。普通の内の接待と変らない。女中さんは鄭重を極めている。やがて私から殿下に逐一沖縄の特殊事情を説明した。無表情のまま聞いていられた。就学率を質問された。産業について特に水産業についてどうかと質問。教員の資質は日本も低下しているとか日本も今困っているとか、日本ばかりから援助を求める事なしにアメリカの民間運動もしたらどうかと一々反駁の質問をされた。又戦前も赤字であったろうとか、学校はどうであったかとか又戦前長い間かかって出来た校舎を一挙に解決は出来ないから徐々に解決せよとかの質問反問があった。癩にさわる様な事もあった。御気の毒であったとの一言もなかったことは残念であった。約一時間位会談、よく質問よく聞いてくれた。一時間経過後辞去す。やがておいしい御菓子が出た。一つ食べた。玄関で殿下と共に写真を撮った。かくて歴史的な会見を終え帰る。〔略〕

3月15日（日）晴

〔略〕<sup>マ</sup>午2時半、仲原先生、伊元先生が見えお伴して澁沢先生訪問。新崎、金城氏と落ち合って一行8名で行く。先生は快く会って下さる。私の話をよく聞いて下さった。はじめから態度が好転の兆が見えた。色々質問があった。しかし財界を動かす国民運動なら御めんだとの言い分であった。金城さんから学校生徒児童が主対象であるとの説明でやっと納得されたらしく、とにかく組織や事務局の事を聞かれ、とにかく副会長高嶺さんに御会いた上、態度を決定するとの御話。これで一応は御受け下さるものと了承した。〔略〕

3月22日（日）晴

〔略〕一行は神戸に座談会に出向く。神戸沖縄協会事務所で幹部方に会って挨拶する。7

---

<sup>39</sup> 渡名喜守定（1902-1993）。元海軍大佐。高松宮と海軍時代の友人。沖縄に帰郷後は沖縄銀行役員などを歴任。

時頃から次の会場に出かける。その会場が大変な所だ。全くの田舎の開拓地。沖縄人部落だ。こんな所にこの催をするなんて人を馬鹿にしていると思う。私は気分が斜めでない。良元村と云う所だ。〔略〕

3月24日（火）晴

〔略〕山陰は戦災を全然受けていない。寒い所と聞いていたが却って暖く沿線に沿うた田や畑も青々として春らしい。

散々<sup>マア</sup>伍々<sup>マア</sup>百姓が呑気<sup>マア</sup>そうに農業をしている。働きも楽<sup>マア</sup>なそう<sup>マア</sup>だ。田畑も一坪の無駄もなくよく耕されている。部落も建物もきちんとして羨しい限りだ。沖縄だけが何たる事か。砂漠の沖縄よ。〔略〕

4月16日（木）晴

山陽新聞で座談会。宇野局長の御厚意只感謝。外村民芸館長、山内君、学生五名出席。歴史的な一日だった。そのまま別れるに偲びず今晚もう一度懇談したい。そして倉敷の方でこれを決行<sup>マア</sup>する<sup>マア</sup>ことになった。今朝の新聞の二面とも記事がでか<sup>マア</sup>でか<sup>マア</sup>出た。〔略〕

『屋良朝苗日誌 058』

4月20日（月）晴

〔略〕新里君<sup>40</sup>からも二通の手紙、電報もあった。コザ地区、具志川からの電報もあった。今度の選挙に死物狂いでやった様だ。それにしては自分は無関心過ぎた。それでよいのだ。皆がよくやって呉れた。皆に感謝あるのみ。新里君はじめ心を一つにしてよくやってくれた。私が居てもあれ程の事はやれなかったと思う。沖縄教職員はよく強くなってくれた。これからだ。帰ったなら一段と拍車をかけるよ。強くなろう。進むべき方向は決まっている。不退転の信念が出来た。具体的事実によって我々の行動は裏づけられる事になるから強くなる。一日も早く帰って行きたいとも思っている。皆の選挙に対する手紙は血を湧かし肉おどる気がするが、しかし今後の教職員に対する圧迫も覚悟しなければならないし、又正々堂々の良識的指導もならないし思想理念の確立実践も心がけねばならない。指導を誤ると大変になる。崎本部<sup>41</sup>の校長が国頭から民主党の候補として出馬するそうだが信念のない者だ。教養と識見のない者だ。さて社大党からの候補者は誰になることか。愈々多難の時代だ。それに中部の選挙も無効にするというし奴等の圧政は露骨になった。植民地化の具体的あらわれである。暗黒の時代だ。正に暗黒だ。一世の指導者がほしい。人物がない。東京に居る人が行ってもこれという人は殆どいない。沖縄よ何処に行く。慨わしい。選挙の結果女教員が肩をだき合って泣いたとも云う。いじらしい。しかしよく指導しなけ

<sup>40</sup> 新里清篤沖縄教職員会事務局長か。後に沖縄自民党から立法院選挙に出馬し当選、沖縄自民党幹事長となる。

<sup>41</sup> 沖縄島北部に位置する本部町内の一地域。

ればいけない。これは只給与ベース問題から来る感情問題としてはいけない。あくまでも今の与党の植民地的乞食根性の批判から来なければいけないのだ。指導に注意を要す。ここまで来れば私も結局無理のない限り教職員の為に挺身渦中にとび込まねばならないだろう。〔略〕

4月24日（金）晴

〔略〕それから日の丸のバッジも見事なのが安く入手出来る。その方に決めたい。〔略〕

4月27日（月）晴

〔略〕ヨシ<sup>42</sup>からの手紙が来た。彦坊はやはり一進一退の様だ。ヨシにのみ苦勞させて悲痛だ。俸給査定についても云って来た。あれ位の増俸で気にするヨシの心境を思うと可愛想であり断腸の思いである。ヨシよ許せ。余りに我々の社会的地位の割に惨めである。〔略〕

4月29日（水）晴

9時半東京発。長嶺さん中村さん若い青年三名で書類を準備し出発に間に合らし而も見送りに来てくれた。パスが効果的<sup>43</sup>。汽車の中も苦勞もなく三度目の西下である。勿論外の景色は何一つ目に止らない。やがて豊橋市に近づく頃車内アナウンスはヤラサチエ。6号車事務室まで来てくれ電報との事。びっくり三等車を通って行ったが混んでいる事話にならない。中を通るのも一苦勞。又混雑して居る人々を見ると真に気の毒。そうしないですむ様な方法はたたないのかな。真の民主的文化国家になればそれが出来るだろう。しかし只他府県に来た事のない沖縄の人々もある。汽車に乗った事のない人々もある。全く原始的生活に満足している人々もある。それを思うと全く人生に疑問をもつ。6号車の事務局には車掌はいない。30分位待った。電報は全く予想した通り川見さんから。豊橋駅でまつからと。車掌は更に私に会いたい人があると案内してくれた。誰か一寸戸迷ったが気がつかない。迷っている内に面会人があると云う再び知らせ。かけ出して見た。川見さんの奥様だ。御会いした。御変りはない。肥えて居られた。1分位挨拶程度。先生は出張との事。挨拶する内に出発のベル。何と急がしい面会だろう。これが恋人や子供との面会であったりすると辛いだらうと思った。

車席に戻って思い出した。そうだ謝敏銳君だ。理科部にも居った台南時代の教え子だ。行って会おうと思っている時に謝君が訪ねて来た。18年に上京以来帰台しないと。理論物理を勉強し今明大で助手か何かして生活をしながら勉強をして居るとの事。話す気持はつい昔の同じ日本人としての気持に帰り勝ちだ。しかし、今は奇しくも二人共日本人ではない。彼は中国人、自分は国籍不明瞭。しかし師弟の気持に変わりはない。名古屋まで色々話して別れる。君の将来に幸あれと祈る。〔略〕

---

<sup>42</sup> 妻、屋良ヨシのこと。

<sup>43</sup> 国鉄無料パスのこと。吉田嗣延の発案、働きかけにより運輸省から得た。

5月5日（火）曇後雨もよう

今日は暇だったのでゆっくりねたいと思ったが却って目がさめてねられなかった。皮肉なものだ。午前中は日記を書き綴り旅行日程の変更に費した。午後は喜屋武君<sup>44</sup>と二人奈良を一巡したいと思って2時の遊覧バスに乗った。若い時代とちがって何の感興もわかなかった。ごみが多く汚れた奈良であった。殊に足が痛くて辛かった。旅行の使命上こんな見学なんか全然頭に入らない。しかし大変な人出だ。今日は子供の日だ。子供を楽しませ催し物もあった様だ。ここの子供は幸福だ。それを見るにつけても沖縄の人々沖縄の子供等が可愛想だ。幻滅だ、悲憤だ、どうも自然は不公平だとしみじみ思う。内では今日の子供の日をどうして過ごしたであろうか。彦坊はどうしているであろうか考えると気がめ入る。いばらの道の闘いだ。め入っていてもいけないのだ。頑張ろう。何の幻滅だ。いざ元気を出そう。きっとよい所を見つけつくり出して行こう。〔略〕

5月9日（土）晴

〔略〕途中の畠は一面麦の穂が出盛る頃。青々として波打っている。道をはさんで畠一面に麦は穂が出る、菜は花盛りと云ったその頃か。麦の青々たる間を菜の花が点綴している。とても気持がよい。見ても大変豊かそうである。又沖縄の百姓等に比べると豊かだろう。あれでも日本は貧乏だと云う。沖縄は貧乏を通りこして人の世の地獄だ。このような所での農業は骨も折れまい。又楽しかろう。実際沖縄の人程可愛想な人は恐らくこの世には居ないであろう。〔略〕

5月16日（土）晴

〔略〕中央線路の景色、山又山であるが、野も畠も緑をたたえ、白赤のつつじが咲き乱れ若やぐ気持、うるおいのある気持になる。何処も同じ麦畠が整然としてみのっている。うらやましい。全くうらやましい。このようなめぐまれた環境に住み他府県の人々と太刀打ちして行くには余りに沖縄の我々は惨めである。〔略〕

5月25日（月）晴

〔略〕汽車の窓から見える自然は正直で何処も同じ青々として深春の景色だ。日本はやはりせまい国だ。何処も同じ。只、日が早くくれる事が感じられる。目立つ事は田が麦が殆ど植えられていない事だ。関東関西九州では田は遊んではないのに、ここでは何も植えられていない。次の稲作の田ごしらえをしている。馬を使っているが原子的だ。沖縄などと同じである。それからすると台湾ははるかに進んでいる。能率的である。〔略〕

---

<sup>44</sup> 喜屋武真栄（1912-1997）。沖縄教職員会会長、参議院議員。本運動では沖縄教職員会政経部長として屋良と共に全国を回った。

『屋良日誌 051』

5月29日（金）曇

〔略〕大湾氏、東氏等が違反に引っかかったとは気の毒千万。いよいよ彼等は教職員会と闘争せんとするか。却って彼等は大損をするぞ。ああしかし自重してよく指導しよう。教職員の存在価値は余りにも早くにあらわれ出したなら家族の者は如何にやあらん。〔略〕

5月31日（日）晴

〔略〕五時三十六分発にて青森出発。汽車の中は案外冷える。沿線は田植えがはじまっている。少年時代の田植えがなつかしい。ここあたりもやはり原始的な耕作しかやっていない様だ。台湾の方がはるかに進んでいる様に思う。〔略〕

6月2日（火）晴

〔略〕途中田植が盛。少年時代の田植の時が思い出されてなつかしい。田植、田ごしらえ、やはり沖縄とかわらない。但し沖縄よりはるかに楽だ。女子が多いのが特徴。〔略〕

6月3日（水）晴

〔略〕かくてかくて懸案、全国行脚運動の幕はおりたのである。ああ感慨胸に迫るものがあった。数年前からの私の胸の中の計画が私の手によってここに芽出度く完了されたのである。実行した実践した。必ずや内外に大きな反響があるにちがいない。「全国にわたる懇願の旅、今終る。御協力感謝す。意気ますます盛なり」の電報を八通、駅にて大急ぎで打電。大倉氏に送られて汽車に乗り新潟を出発。〔略〕

6月6日（土）晴

〔略〕会后、仲原先生に案内されて日本橋の有名なウナギ屋に行って大いになぎ井をおごられた。偉い御馳走になった。先生には毎度大変御世話になって感謝にたえない。ウナギ屋を出てコーヒー屋に行ってコーヒーをおごられた。感謝、感謝。実のある先生だ。

6月9日（火）晴

〔略〕かく挨拶が終って幹事長の提案即ち各県自主的に協力すると云うことに対し拍手で協賛。かくて募金運動は全国教育長会で申し合わせ協力する事になったのである。有りがたや有りがたや。涙が出る位嬉しかった。それもこれも皆私共の運動が奏功したのである。今度の全国運動の効果は実にはかり知れないものがある。実に我々の運動は予想に数倍する運動となったのである。断じて行えば鬼神もさけるのである。かくて本日は再び歴史の日となった。只私に二、三分挨拶をせしめなかったことは遺憾だった。私が話するのでなければあの様な集りはしまらない。〔略〕

6月11日(木) 晴

夜二時東京発。二等席満員。仕方なく三等席で名古屋まで行く。名古屋から二等に乗りかえ亀山で又乗りかえて八時四九分山田着。もう時間もないので本部へは行かずに直ぐ会場へ行く事にした。途中うどんを一杯食べた。会場〔日教組第10回定期大会、宇治山田〕は厚生小学校の備堂。九時半もう満員だ。来賓席に着席す。メッセージは三分以内と云うことになった。はじめから空気は極めて険悪である。開会が四〇分くらいおくれた。その為非難野次けんけんごうごうたる様だ。本部に対する不信の声は非常に高い。本部としては誠意を以てやっていると思うが多方面から批判されると自然あぁなっていくのだろう。いよいよ開会。空気から見るとまあ御祭りだ儀式だとの感を深くする。午前中は地元の方々のメッセージのみで一般は午後まわった。岡委員長はじめ幹部その他実に見事、堂々たる論客だ。これでは議政壇上に立てても全く引けを取らないであろう。午前の主なるプログラムは経過報告で終り。午後愈々メッセージ。自分も原稿では時間がかかると思ったので三分位挨拶をする。皆から大拍手で迎えられ話中数度にわたって拍手で激励され終って万雷の拍手。思いなしか目に涙する人さえあったと見た。かくて深い感銘と同情がここでも全会員から見ることが出来た。屋良さん頑張れの声援もあったとの事であった。しかし沖縄問題は最早事新しい問題ではなく新聞社あたりも種にしない。僕等も一般来賓と変りはないまでに沖縄が通俗化した、一般化したのだ。方々の運動の成果ならん。さて午後から経過報告に対する質疑応答。物すごい。大体本部中央執行委員に対する非難攻撃の集中だ。当局もさるものだが、しかしたちだ。ほとんど中央執行部を支持する者なし。そして取り上げている問題が殆ど政治問題ばかりだ。例えば吉田内閣を阻止する為にどう云う手を打ったか。或は義務教育国庫負担法が上程されようとした時のスト中止に対する責任追究、新潟の軍事基地問題に対して打った手とか、その他殆ど政治問題而して現内閣とのほげしい闘争内容ばかりだ。メッセージに対しても社会党右派なんぞ相手にしない。むしろ共産党を歓迎する有様だ。危い危い。大会スローガンも全部対政府的なのばかりだ。最早生活擁護の組合活動ばかりではない。一種の政治結社見た様なものだ。〔略〕

5月16日(火) 晴

〔略〕本日は我々の送別会で丸ビルの地下食堂である。その前に長浜先生が詩をつくってがくぶちを送って下さる。感謝する。いよいよ送別会だ。伊江先生、神山先生、翁長先生、瀬長先生、仲吉先生、仲本先生、高嶺先生等々の御歴々をはじめ集る人々は百人以上であったろう。こんなに集った事は無いということだ。伊江先生の感激的な御言葉、高嶺先生の称讃の辞。只恐縮あるのみ。穴あらばは入りたい様な気持。私にはこの運動は大した事の様を考えて居なかったのだが、皆さんからは大変だったらしい。この位の運動で沖縄の運命が開展される事では絶対はないのだが。とにかく真剣に真面目にやったと云うことだけは云える。人生意気に感ずる、である。之丈の先輩からこんなに称讃され感謝されるとは光荣此の上も無いが、しかしそれ丈にその責任は重且大である。日本全国にもアッ

ピールした以上、今後私の動向には非常な責任が倍加された。沖縄に帰ったら更に大きいだろう。余りちやほやされてはいけないと思うが。

乱世になれば或は私の性根があらわれるかも知れない。恐らく今まで以上に世に特質を発揮するのではないかと思う。どうも今までの所は行く所可ならざる所なしの様だ。知念高校然り、文教部長然り、教職員会長然り、今度の計画運動然りだ。特に今度の運動では広い高い範囲に動力を発揮した様だ。とにかく前人未到の業を打ちたてたわけ。しかし実際又沖縄に対する認識はうんと高まった事は事実だ。校舎運動の効果が上るとすれば我々の運動は特筆されてもよいだろう。感激の時間は過ぎ、感謝状を送るなどの動議が起つたりして閉会。〔略〕

8月7日（金）晴

〔略〕沖縄人の恩知らずと云われても困るのでつとめて手紙書くぞ。

### 【1959年—宮森小学校ジェット機墜落—】

『屋良日誌 006』

1959年6月30日（火）晴

〔略〕十一時頃事務所に帰ってみると、Z機が宮森校授業中の児童の上に落ちて炎上中との事。驚いて直ちに石川にかけつける。この様な不祥の事件がいつ起るか分からない沖縄の現状いよいよ実感をもって味わった。宮森一帯は不慮の事故により阿鼻叫喚である。余りにショックが多く混乱の限りをつくして仲々統制ある処理も出来ない。トタン屋根三教室燃焼かいめつ。それ近くの民家の三十軒位もえつくしている。私が行った時に知れた事は即死六名、病院で四名死亡との事であった。百名位の児童は石川の民間医院、コザ中央病院、軍病院に応急収容されているとの事。被害の跡を見た。特にせんりつ〔戦慄〕をおぼえたのはブロック二階の一教室であった。ここはもえてはいなかった。Z機の爆発の破片が大小散乱。ブロックの壁や硝子を破壊。即死した子もあつたらしく二ヶ所には血がたまっている。あの状況ではもっと沢山死亡者が出たのではないかと思われた。只癩にさわった事はこの惨憺たる状況を軍は大急ぎで片づけ民に写真をとらせないという事だ。

新聞社等の写したフィルムは没収されたという。甚だ奇怪至極だ。この問題は取りあげられなければならないと思う。

焼死した子供等の変わり果てたすがた、二目とは見られない。全く惨酷だ。人の世の出来事とは思われない。それを父母兄弟がどうして見られよう。又確認出来ようか。病院に収容者名がいよいよはっきりして来るにつれ変れはてた死体の身元もせば〔め〕られて来た様に思ったが晩の八時頃まで五柱が未だ確認出来なかった。父母兄弟としては無理もない。あの姿をどうして我が子と思われようか。

これも基地なればこそ起きる事だ。哀れな沖縄悲しい被害者等よ。余りにも残念そして痛ましい。ああ亡くなられた児童等よ、人々よ、くやしいだろう。われわれ手の施しよう

もない。只見てきたん〔嗟嘆〕するのみ。八時過ぎ内に帰る。歴史上かつてない事が起きた。六月三十日、今日の日忘れることの出来ない不幸の日だ。〔略〕

### 【1960年—沖縄県祖国復帰協議会発足、アイゼンハワー大統領来沖—】

『屋良日誌 007』

1960年4月28日（木）晴後曇〔復帰協発足の日〕

〔略〕五時半から六時半まで復帰協議会に出席す。人の集まり大変良し。成功であった。よくやって呉れたと思う。チョウチン行列も盛大だった由。とにかくやってよかったと思う。若い人々の働きに感謝をする。〔略〕

『屋良日誌 008』

6月19日（日）晴〔アイゼンハワー来沖〕

九時過ぎに家内を伴い、嘉手納空港にアイク迎えに行く。少し時間が早かったので大謝名から普天間廻りをして十一時過ぎ空港着く。暑いのに冬の着物や黒服それに黒の借衣服をつけた住民代表は漫画ものだ。アメリカ人は服の色など別に黒というわけでもなかった。予定より十分おくれてアイク着く。何の事もない。一寸姿を見て、何の感激も湧かずにコザ、普天間、首里経由で内へ帰る。請願デモも盛大だったらしい。請願デモは皆の心の底にあるものを代表した具象化だ。それを見事に多くの人は歓迎した。デモは一部だと見るのは誤りだ。その様な見方をする所にアメリカの甘さがある。アイクはデモを回避して政府の裏を通過して空港に行ったとか。拙い。〔略〕

6月22日（水）晴

午後二時、ギールス<sup>45</sup>、キンカー氏と会う。去る十九日のアイク来島の時のデモは暴力デモと認めるについて謝罪（暴力デモと認めこれを支持せざる声明）をせよとの事。近い中に瀬長副主席<sup>46</sup>が声明書を出すはずだからそれにさんせいの署名をしたらとの事。歴史は繰り返すか、教育会館<sup>47</sup>をつくった時にこんな目にあった。そんな微妙な事は簡単には返事はできず、私も云うべき事は云って驚きもしなかった。

更に謝罪声明をせぬ限り落成式<sup>48</sup>に出席し祝辞をのべる事は矛盾とは思わないかとの事であったが、私は請願デモと思い、それがいろいろの事情のためにちっと行き過ぎがあった程度であるから祝辞を御願する事と矛盾を感じないと云った。〔略〕

<sup>45</sup> ロデリック・ギリス（Roderick Gillies）米国民政府副民政官か。

<sup>46</sup> 瀬長浩（1922-1997）。1946年沖縄民政府に入り、以後経済行政を中心に担う。副主席、復帰準備対策室長、沖縄銀行会長などを歴任。

<sup>47</sup> 1954年、沖縄教職員会が会員および児童らによる寄付によって建設した施設。

<sup>48</sup> 沖縄教職員共済会館「八汐荘」落成式のこと。屋良が文部省や自民党などに働きかけ、公立学校共済組合の支出により建設した。

### 【1965年—佐藤首相来沖—】

『屋良日誌 017』

1965年8月19日（木）晴

朝早く起きる。八時に出発準備をする。九時に徳元先生と一緒に飛行場に出向く。今日は歴史の日だ。無事にすめばよいと思う。

十時五分総理一行到着。

ステージに総理を迎えた時は正直に云って流石涙が出た。沖縄の歴史的出来事だと思う。松岡さんの挨拶、弁務官の挨拶、次に佐藤さん挨拶、特に沖縄の問題が解決しないまでは日本の戦後処理は未だだとの発言と、また沖縄を直接見て聞いて肌で感じて今後の施策に反映させる、そして期待に沿いたいとの事が印象的であった。

総理を迎えて午前中の行事は先ず無事に終えた。安心した。日の丸も沢山出た。先ず先ず上出来と見てよい。大変な人出であった。直ぐ国映館の歓迎式場に行く。万才三唱は私になっていたが長嶺議長に代ってもらった。万堂に溢るる参加者。万雷の拍手に迎えられて入場。総理の面もちは感涙にむせんでいる様子であった。

いよいよ挨拶になるとほんとに感涙にむせび話をつまらせている場面もあった。率直のところ私は沖縄に取っては歴史的の一員と云ってよい。

此の歴史的な出来事が私共の期待する歴史の展開の発足点にならねばならないと思う事だ。総理の話から真実感と親近感を感じた。次に教育問題を最重要視して援助したい事、而も日米協に積極的に提案すると云う二点は東京で責任者から直接聞き得なかった事だ。話は真実味に溢れていたと思う。長嶺氏の万才三唱の後に直ぐとびだして同じ話をくり返し握手をしたりして、皆の為に万才三唱の音頭を取ったりしている所総理の人柄は凡そ見当がついた。感情が勝っている人と思う。七時半からワットソン<sup>49</sup>の歓迎レセプションに出席、ワットソンからも松岡さんからも手厚く紹介された。文部大臣調査局長にしばらく話し大浜先生の紹介で田中幹事長に会う。子供等の歓迎の風景を見ては日本文部行政はなっていないと云っていた。必ず協力すると約束してくれた。かねてお世話になっていた三井さんに偶然にお目にかかる。而もワットソン招待の夕食会でも隣席で都合良かった。復帰協のデモ隊がホテル前で大暴れ。総理一行もホテルへ帰れないと云う事態が起った。遂に案じていた事がおきた。

### 【1967年—佐藤・ジョンソン共同声明—】

『屋良日誌 021』

1967年11月16日（木）曇

佐藤ジョンソン会談コミュニケが出るので昨夜から緊張す。詳しい発表は聞かなかったが沖縄に関する事の概要は分った。朗報ではなかった。施政権の返還について継続して話し合うというものだ。重点に考えている時期の明示にはるかに遠く、従来よりそう前進

<sup>49</sup> アルバート・ワットソン 2 世 (Albert Watson II) 高等弁務官。

とは見られず。がっかりす。不平、憤懣にたえないものがある。泰山鳴動したけれどもこれ位の事しか出なかった。小笠原の返還を土産にして沖縄問題も含めて前進との印象を与えている。しかし論じつめて考える。沖縄返還については明るい希望は出て来ない。

二時から理事会があった。抗議声明書を出す。〔略〕

### 【1968年—琉球政府行政主席選挙当選—】

『屋良日誌 022』

11月11日（月）晴〔琉球政府行政主席選挙で当選〕

開票。九時頃には会館に行く。ホールで皆開票に吸いつけられていた。はじめから少しの差ではあったが私の方に歩があった。外の親しい人の開票の結果を見るより楽であった。

当選の時の第一声は朝夫、嶺井君等の手で準備されていた。十二時頃になると当確の連絡あり。しかし未だ三〇万票しか開票されず十三万票残っているので楽観は出来ないと考えた。しかし報道人の強腰に押されてホールのステージに上って人の波をかきわけ第一声を放つ。マイクを沢山つきつけられて眼鏡もあたってひびがは入った。二万票足らずの票差の時である。大変の感激の渦である。私は然程昂奮はしなかったと思う。今日開票途中琉球新報ホールで池宮〔城〕社長との対談もあった。第一声後記者の質問に答える。それからは皆にしわくぢやにされ報道界に引張りまわされて大変であった。琉球新報やタイムス、それに本土各社、NHK等から電話、美濃部先生<sup>50</sup>からの電話、神山先生、高嶺芳子さんからの電話、大変な騒ぎである。その為にあいさつまわりも出来ず家内が代って那覇、中部まではまわつたらしい。私は夜の十一時半まで報道陣に引張りまわされた。しかし然程つかれもせず第一夜は終わる。

沖縄の歴史に大きなエポックを印した結果であり其の一日であった。私を媒介する事によって、私を活用する事によって、沖縄の歴史づくりの一頁がかざされたという事になるか。それを考えると感無量。殺到する権力金力に完全に打ちかった日である。やはりこの様な生き方が私の宿命なのか、使命なのか。戦前戦後の私の歩みは期せずして今日の立場に押し進められていたのではないか。世界の太田氏の論説には過去の私の比類ないリーダーシップをたたえている。その様な指導性があったかどうかは私には分らない。只真面目に過ごしてきただけと思うが。

やはり運命というのを感じ感無量である。地下の父母や祖先や亡き子等はいかに見て居られるか。すき好んでえらんだ道ではないだけに当選したと云っても側で喜んで居られる方々程にその雰囲気にはひたれない。

---

<sup>50</sup> 美濃部亮吉（1904-1984）。マルクス経済学者。法政大学、東京教育大学教授などを歴任。67年、社会党、共産党の支持を得て東京都知事に当選。屋良の選挙戦においても「美濃部方式」が参考にされた。

12月1日（日）晴〔行政主席に就任〕

今日八時半松岡氏<sup>51</sup>と事務引継ぎで主席就任す。各局長に辞令交付直後、県民への就任あいさつ。テレビ放送を見る。タイミングは良かった。記念写真をとる。記者インタビュー。

二時、プロ野球始球式。

那覇市長選挙。早目にすまして出かける。今日からは沖縄の事一切不肖私が引受ける事になる。思えば感慨深く、又我乍ら気の毒に思う。しかし何か運命だとの感がする。来し方を考えて今日のこの日に自分は刻々と押しやれられた気がする。とにかく誠心誠意真心のままに邁進しよう。

当選以来刑事二、三名に守られ住宅の前は夜は不寝番の警官に守られる。住宅の周囲は鉄線を張る。何と不自由の日が続く事か。

### 【1969年—琉球政府による交渉過程—】

『屋良日誌 094』

1969年8月9日

ブレーンとの話し合い

宮里松正<sup>52</sup>、喜屋武、福地<sup>53</sup>、亀甲<sup>54</sup>、新垣、大島

本土並みについて

宮里氏

安保を中心として日米の取決めをそのまま沖縄に適用という事。

施政権を放棄するという事だけで社会生活とのかかわり合いや社会的事実も同等のあつかいして本土並みという事ではない？

亀甲氏

具体的に信念を明確にする時期。

決定する権能のない者に答出させるか。

この条件では復帰しないと云う様な事は私としてはそう容易に決定は出来ない。

本土並みで反対するか

20年余も沖縄は苦しんで来ているのだ。本土の人々はどう苦しんできたか。

今まで苦しんで来たわれわれだ。

復帰したらもう同じような苦しみを与えないでもらいたい。

基地撤去という事については終結としてはそうだと答える以外にない。

---

<sup>51</sup> 松岡政保（1897-1989）。第4代琉球政府行政主席。のちに沖縄電力社長就任。

<sup>52</sup> 宮里松正（1927-2003）。弁護士。屋良政権では私設顧問、副主席などを務める。後に自由民主党から立候補し衆議院議員、沖縄開発庁政務次官となる。

<sup>53</sup> 福地曠昭（1931-）。沖縄県教育振興会事務局長。後に沖縄教職員組合委員長、連合沖縄副会長などを歴任。

<sup>54</sup> 亀甲康吉。沖縄県労働組合協議会議長。2.4ゼネスト混乱の責任を取り1969年10月に辞任。

しかし今度の交渉は撤去は打ち出してない。それを打ち出せと云うか。私は基地には反対という表明出しているが、そうは云わない。しかし、基地反対という立場故に基地を容認する立場はとらない。

施政権返還を基地とからませる様にして二者択一をせまることに対しては権能のない者には答えられない。只われわれは基地や安保の手段とせず、からませる事なく沖縄を返せと云う事しか沖縄の立場としては云えないではないか。またそれでよいと思う。

日米交渉では沖縄が要求をつきつけて答えたらその要求は容れられるか。

とにかく何らかの形に結着しても内容について容認は出来ない事もある。

核つき、自由使用となったら日米交渉はやめよと云うか。交渉やめよと云うべきでない。佐藤総理の退陣を求める以外にない。あるいは国民に信を問うてからいけと云う外はない。

8月12日

琉大先生方

宮里氏<sup>55</sup>

1. 基地の態容<sup>マモ</sup>について日米で決めるべきだと云う事は当方として積極的に云うべきではない。向うに任すべきではない。
2. 4月に立法院で決議した内容の主張をした方がよい。
3. 本土並みについては  
機能面 規模面 両面について考えねばならぬ。  
基地公害等が本土並みに埋没されていないか？  
沖縄基地は沖縄県民の安全の為に論じられていない。  
沖縄が常に手段、方便、犠牲的に考えられてきた。

宮里氏

- ①機能の面では、核基地、自由使用、いけない。
- ②沖縄復帰が防衛強化や他のかけひきに利用されていけない。  
沖縄の為に安保を弾力的運営して曲げていくべきでない。
- ③本土並みとは何か  
**安保とは？**  
安保等については復帰させてから出てくる質問だ。
- ④佐藤訪米の件  
あらゆる機会を把えて要求する。  
沖縄としては注意深く見守っていく。  
要求をつきつけ実現を見守る。
- ⑤沖縄の要求が全面的に否定されたら反対せざるを得ない。
- ③帰る時点では県民の意志を充分に取入れよ。

---

<sup>55</sup> 宮里政玄（1931-）。当時琉球大学教授。専門は国際政治学。

◎弾力的運用

No、Yes あり得るとはごまかしではないか。

当初は No と云う為の歯止め役。

今度は Yes を加えると自由使用を許すと云う示唆である。現状維持になりかねない。

- ④沖縄を返還させる何分かの犠牲の面も出てこよう、しかしそれは沖縄に払わすべきでなく国全体が犠牲を負うべきだ。

新城先生

特別交付税

政治的ベースで決定して流せ

特別立法による措置

8月14日

安里積千代氏<sup>56</sup>見解

- 1.佐藤訪米に向うから同行をせまられたら？

妥結←県民の意志の反映というこの見せかけに利用され責任転嫁される恐れがある。沖縄の自民党の議会から派遣の動きがある。一連の関係はないか？

- 2.核ぬき本土並について

沖縄の与党側、民主団体では真意をはかりかね不安と疑惑がある。したがって私としては直ちに容認と云うわけにはいかない。聞く事がありとするならば沖縄の与党側の意見を聞いてもらいたい。という態度では？

- 3.本土なみは言葉そのものからは尤もである。

しかし大きな疑問がある。

佐藤ジョンソン会談以来一貫して基地の重要性を大前提としてその価値を強調してきている。

本土の基地と沖縄の基地はその前提から大きな差があり決して並みではない。

基地の規模密度も比較にならぬ。

真に本土並みに同じ規模に縮少<sup>マツ</sup>されれば拒む理由はない。しかしわれわれの立場としては基地は容認するわけにはいかない。

本土並みに規模縮少<sup>マツ</sup>恐らく 80%→90%整理しなければなるまい。現在の規模のまま是認は出来ない。

- 4.安保を前提として

事前協議も本土なみと云っても沖縄の基地が現状で是認されていれば別に施設の変更にならぬから事前協議は意味をなさない。

---

<sup>56</sup> 安里積千代 (1903-1986)。政治家。沖縄社会大衆党委員長。後に衆議院議員。民社党に移籍後、沖縄県知事選には自民党・民社党推薦で立候補するが革新候補の平良幸市に敗れる。

事前協議の総括的事前了承もあり得る。(安保適用しても)

疑惑の解明はされていない。疑惑と不安をはっきりさせる必要がある

具体的内容が明らかにされない限り容認は出来ない

5.佐藤訪米阻止については？

沖縄にもその声はある

しかし日本の外交権は内閣にある。内閣の責任者が折衝する事に反対する理由はないと主席としては考えている

8月15日

総理との話し合い 8.15 3時40分-4時10分

木村副長官<sup>57</sup>立ち会い

P23<sup>58</sup>、総理の復帰のメドつけに対する決意と見通しについて。

答

① 結着をつけなければならないと思うがそれは考え方によるのではないか。交渉に行く事を阻止するというのがあるのは残念。それでは解決にはならない。行って交渉し結果を見てから、かれこれ云うのならともかく行く前に阻止すると云う事では困る？この事は側近の話の中からもうかがえられたが沖縄の動きについては気にして居られる様だ。

② P24、国政参加の見通しについて

渡米交渉してメドをつければ国政参加もその線に沿って解決するものと思う。

③ P24、毒ガス兵器の撤去について

総理

半年そこらに解決しそうにはない。しかし撤去の方針に狂いはないから主席も弁務官に催促しやすくだらう。同じ事は総理についても云えるから早く撤去する様に、話をすすめてくれと要請す。了解する。

④ B52 撤去要請

ベトナム戦との関係だろう。しかし日本としても早く帰ってもらわねばならない。

⑤ 原潜の那覇港寄港中止について

特連局長<sup>59</sup>の助言

調査団の調査結果が報告されたら必要な予算措置を講ずる。総理これを了解する。県民の不安な解、自分(総理)に取っても責任があり君(ヤラ)にとっても責任があるからと云われた。

<sup>57</sup> 木村俊夫(1909-1983)。佐藤内閣で1967年に官房長官となるも、68年に再び副長官に戻る。その後経済企画庁長官、外務大臣を務める。

<sup>58</sup> メモ内の参照すべきページを示している。

<sup>59</sup> 特別地域連絡局。総理府の内部部局。南方連絡事務局を改組し北方領土も管轄とした。

結局責任は総理にある（屋良）と思うからその責任を求める。

⑥ P26、予算要請の後を受けて

援助形式にとらわれず金額をふやす方法を自分も考えて見たい。

沖縄行財政はおくれている。

復帰も近い、帰ってきたら無駄にはならぬ。国のものとしてやると。

『屋良日誌 095』

8月18日 2時半～3時12分

木村副長官

1. 復帰問題について

① 佐藤・ニクソン会談によって、復帰の時期のメドは確実につく。

② 佐藤訪米は11月ではなく、12月の初旬になる。（オフレコ）

2. 基地の本土並みについて

① 核は入れない。

② 沖縄は地理的客観性から本土とちがった戦略的価値がある。しかし、それだからといって差異をつけることはできない。

③ 安保条約の枠内で本土と差別しない。

④ 復帰後基地の整理統合縮少をする。しかし、復帰までは無理だと思う。

⑤ 本土の沖縄並みということは理論としてはあるが、それを防止する。

⑥ 本土も20年前は現在の米軍基地の15倍の基地があったがそれを次第に整理縮少したのである。従って72年までは現実的に無理であるが、返還後は整理縮少していく。アメリカもそれを考えているようである。

3. 弾力的運用、エース・ノーについて

① 復帰後、本土はノーで沖縄がエースということはない。

② 緊急発進（有事）の場合は本土も沖縄もエースになる。

現在だって同じである。これまでエースになる事態がなかっただけである。

③ 極東の範囲はフィリピン以北、北朝鮮までだが、そこで事が起こった場合は当然エースになることになる。それ以外の地域の場合はエースにならない。

④ 返還後本土の出撃はないのに、沖縄だけからの出撃はない。

⑤ エース・ノーは沖縄返還とは関係ない。これまでエースになる事態がなかったので、ここで論議にならなかったが、朝鮮などで問題がおこる場合はエースと言わざるを得なくなるかも知れない。

4. B52の撤去について

① EC121号偵察機の撃墜事件とからんだために撤去の時期がおくれた。

② 国務省は撤去すべきだと言うが国防省がEC121号の関係もあり、双方で論議交渉中であるが、近く明るい希望がもてるものと思う。

## 5. CB 兵器撤去について

CB 兵器には、運搬して撤去するものと、その場で無毒化するものがあるが、無毒化は技術的にむずかしい。しかし、現在この無毒化に着手しており、作業は進行中である。

6. なんでも遠慮なく、率直に相談していただきたい。

8 月 18 日（月） 4 時 30 分～5 時 30 分

場所 米大使館

出席 マイヤー大使、カーペンター、フィアリー民政官外 2 人

1. カーペンター氏に協力したよう新民政官のフィアリー氏にも協力してもらいたい。
2. 弁務官や民政官に対するこれまでの建設的、あたたかい協力に対して感謝している。
3. 復帰問題について
  - ① 主席の要望の線にそって協力したい。
  - ② 返還交渉は建設的静かな外交で進めなければならない。
  - ③ 米国は植民地をもたないし、自由陣営に果たしている米国の役割は大きい。
  - ④ 米国が重要な役割を演じていることは、沖縄にての比重が大きい。
  - ⑤ 沖縄返還については、米国の日本沖縄の自由を守る能力が妨げられないよう望みたい。
  - ⑥ 沖縄返還については、静かなる交渉によって、われわれの期待が実現するものと確信する。
  - ⑦ 佐藤訪米の際、両方が満足する結果がえられるものと期待する。

## 4. CB 兵器、全軍労問題について

- ① CB 兵器問題は大きくなりそうだったが、みんなに迷惑になりそうだったが静かにおさまったことについて、主席の努力に感謝している。
- ② 全軍労問題も予想としてはみんなの迷惑になりそうだったが、静かにおさまり感謝している。
- ③ 全軍労問題については、宣伝活動や街頭での活動（デモ）をする<sup>変り</sup>、静かなる外交をおし進めていきたい。
- ④ ある米国の国会議員からの手紙によれば、対外問題についてなにか事件がおこれば米国内に反発が出るので、そういう事件がおこらないようにした方がよいとのことであった。

## 5. 原潜問題について

- ① 大げさに取りあげられていると思う。
- ② 日本にも原子力船舶の造船計画がある。日本自身の原子力推進力が安全であることを納得させるであろう。
- ③ 日本の原子力船ができれば反対の声は沈まると思う。
- ④ 原子力船は安全であり、アメリカの各港にも寄港している。しかし、沖縄において不安があることは認めるが 20 世紀後半にわれわれは生きていることを納得してもらわなければならない。

- ⑤今後、原子力商船がふえることを納得してもらいたい。自動車に例をとると排気ガスが大気を汚染しているのでこれをなくし馬車や馬にかえろうとは言えないだろう。
- 6.主席は偉大な政治家と評価している。
- 7.主席の沖縄県民を代表しての要望は当然のことであり、その解決のために協力したい。
- 8.米国は日本の沖縄を支配し、汚染したいとは思わない。米国人の友情を信頼して、あたたかい協力をしてもらいたい。
- 9.沖縄返還問題は、安定した三角形のように、沖縄と日本の各辺の協力によって実現したい。すなわち、 $X^2+Y^2=Z^2$ （返還）である。

8月19日（火）6時

マスコミ、情報関係者懇談

△出席

共同通信（横田球生、高橋実）

朝日新聞（大森繁雄）

毎日新聞（高内、山崎宗次）

- 1.沖縄の各団体のこれまでの運動は主席公選が国政参加より強かったと思う。
- 2.今度国会で国政参加が実現され、選挙が行われた場合、各党から一人ずつ選出されるはずである。この場合この人々は沖縄の真の声を代表するのではなく、本土の各党に系列化されるおそれがある。（国策産業等、利権導入の動き等からそう伺える）
- 3.主席の出した予算を骨ぬきにするような人々の中から代表が出たとき、一体どうなるだろうか。
- 4.本土政府から、今回の総理訪米に際し、一切に行ってくれとのことがあっても行くべきでない。
- 5.本土並み基地について
- ①量と質の面、両方とも同一でなければならない。
- ②政府の考えている本土並みにギモンがある。
- ③政府の言っている本土並みは形式面の本土並みにとどまる心配がある。
- ④主席は本土並み基地賛成ということを絶対に言うべきでない。
- 6.佐藤訪米に対する沖縄の態度として、沖縄は阻止というほど要求が強いんだとの意志を表明した方がよい。
- 7.チャップマン<sup>60</sup>は沖縄基地を縮<sup>マ</sup>少しないと声明している。
- 8.6月の愛知訪米の際の主席の要請は弱い感じがした。
- 9.11月にはもっと強い政治的な態度を整理し、文を練って発表した方がよい。
- 10.米国は戦略的兵力を減少している。沖縄からも減少するような闘いを組んだ方がよいのではないか。

---

<sup>60</sup> レオナード・チャップマン海兵隊司令官か。

- 11.返還後は地域協定の上からも必ず基地の整理統合をしなければならない。また、基地の移動も出てくる。
  - 12.最小限必要な（安保条約、地域協定に合わせるために）整理統合が必要である。そういう方向に必ずたどる。
  - 13.本土の沖縄化、すなわち本土沖縄を含めた自由使用化になるおそれはないか。
  - 14.事前協定の弾力的運用は機能の問題であって、地域協定とは別である。
  - 15.米国は日本国民を敵にまわしては悪いので、日本の要求を入れ、ある程度の妥協をするだろう。日本との関係が悪くなれば、米国自体が困る。
  - 16.今回の交渉では、72年返還、核基地撤去、安保条約継続、弾力的運用面では本土並みになるだろう。
  - 17.事前協議は実際上歯止めとして存在したのである。
  - 18.返還後は安保の枠内に入る基地になるので、基地反対であれば当然安保反対でなければならない。
- 現在は安保のカナメではあっても安保による基地ではない。
- 19.今回、沖縄の態度としては、これだけはやらねばならないとはっきり要求を表明すべきである。
  - 20.沖縄自民党の今回のやり方は沖縄だけのものか、それとも本土自民党との関係であるのか？
  - 21.米国においては沖縄の事情について十分認識されていないので沖縄問題を効果的に知らせ世論を喚起する必要がある。
  - 22.主席が渡米に訴えた方が効果的であるが、今からやると佐藤訪米の先ぶれみたいになるのでまずい。
  - 23.米国の有力紙を呼んで書かす方法がいちばんよい。
  - 24.沖縄に米国が投資したものの買いあげについて
    - ①米国は施政権をもっていた以上投資は当然であって買いあげる必要があるだろうか。
    - ②むしろ国県有地を米国が管理して利益をえているので、これを日本は請求すべきではないか。
    - ③電力などは返還までに軍と民のものを分けるだろう。
    - ④電力などできれば沖縄自身買った方がよい。
    - ⑤電力は政府が買うのではなく、九州電力などに買わせたらどうかとの例もある。
  - 25.沖縄は今から確たる計画を立てて経済を考えないと返還後周辺の周辺地域化し、過疎地帯になるおそれがある。

8月20日

午前11時～11時45分

愛知外相・千葉北米課長

#### 1. 沖縄返還時期のメドづけについて

①11月か12月初の佐藤、ニクソン会談で双方の満足する結末がつけられるものと思う。またつきたい。これからの交渉についてはやってみなくてはわからないが、アメリカ大使の言動からもはっきり伺える。アメリカも積極的のようである。

#### 2. 本土並み基地の内容について

①安保を前提としている。安保の枠内で機能や規模・密度を小さくする。

②基地抜きと言うことはひきうけられない。基地の密度、機能を本土並みにする。安保は必要であり、それは基地の存在を前提とする。

#### 3. 基地の整理縮少について

①安保の締結された19年前よりも本土の基地は件数・坪数において縮少されており沖縄基地も返還後はそのようになる。

②返還後、基地は本土並みに整理縮少される。日米合同委で議題になり本土並みに整理縮少するようにし、不用なものはなくしていく。

#### 4. 事前協議の弾力的運用について

①最近これが議論されているが、このことは昭和35年のとりきめの時から変わっていない。

②提供した基地についてエース、ノーの権限は提供者である日本側にある。このことは岸声明でも明らかであり、日本の承諾なくてはエース、ノーは決められない。

③すでに二重の歯止めができており、弱さ強さはあったが法的には当初から現在までなにも変わらない。このことは沖縄返還問題とは関係ない。

④新聞には時々弾力的運用ということが出るが、政府はこれまで国会などでも弾力的運用などと言ったことはない。

⑤適正な運用とは、日本の国益に合致するかどうかということである。

⑥返還後は安保の枠内における一切のものを本土で行うものと同じく沖縄にも適用するのであって、沖縄だけ特別扱いされることは決してない。これが本土並みと言うことである。

⑦主権が本土にかえる以上は、日本が主権者である。従って日本の承認なくしては、自由に使えない。沖縄は本土と差別されることはない。そうでない限り主権回復の意味がない。返還後も租界みたいなものが存在することは絶対にありえない。

⑧しかし、軍人はかたくなであるので、米国側にも相当の抵抗はあるがアメリカの抵抗をはねのけて、日本の主張を押し通す覚悟である。

⑨以上のことをどのような形で文字に表すかが最後のツメになる。

⑩沖縄問題について総理は楽観しており、自信をもっておられるが私は交渉の経験から楽観的にはなれない。しかし頑張りたい。

#### 5. 原潜、毒ガス、B52について

①毒ガス問題はあの事件があったことは不幸中の幸いであった。それがあったために毒ガスの存在がわかった。

- ②全面撤去を約束しているが私はそれで満足しているわけではない。今後最後のアカシを立てるまで頑張りたい。
  - ③B52 については、先日ワシントンでもふれた。米国はわれわれの再三の要求をよく知っている。従ってできるだけ早く撤去したいと言っている。ベトナム戦との関係があるので、ベトナム戦の早期終結を期待している。米国は恐縮している状態である。
  - ④原潜については、返還後は本土並み事前通告制になる。
  - ⑤外務省の米側のセッションの中からの情報によれば、沖縄においても現在 24 時間まではいかないが、数時間前に事前通告しているとのことであるが、その事実がなければさらに確かめたい。
- 6.その他
- ①返還後軍関係雇用者は本土並み直接雇用になるのでよくなると思う。
  - ②沖縄の経済について、返還後如何にすれば県民所得を本土並みにするか真剣に考える必要がある。

## 『屋良日誌 098』

### 屋良所見

#### 基地と施政権の関係

- 1.米国は実際はアジアにおける軍事基地の要として沖縄を確保したい為に施政権を堅持しているのである。だから基地撤去しさえすれば施政権は自ら返還されるのである。したがって本質的には基地の撤去を優先して考えるべきであろう。基地は反戦平和につながりまた基地の撤去は佐藤政権打倒にもつながるから復帰について基地を優先して考えるとそれは階級的闘争になる。
- 2.しかしきびしい現実を考えたとき本土にさえ基地が未だ存在している以上沖縄基地が直ちに撤去が実現するとは思われない。それで施政権返還が本質的考えで実現が困難であるとすればどうすべきか。  
そこで形式的に沖縄基地の成り立ちを考えた時、平和条約三条で米軍が施政権を握った。そこから勝手気ままに基地をつくり出したと云う順序になる。  
とするとその形式的過程をとらえて基地の根をなす施政権を先ず回復させ主権を日本に帰しそれを拠点としてそれが生み出した基地を解決させていく様にする外ないを考える。この様に沖縄の施政権返還を考えていくとこれは民族問題ととらえられる。だから基地、施政権を本質的に追及していくと基地撤去を優先する考え方階級的考え方になり、形式的に追及していくと民族的な考え方になるのではないかと思う。しかし何れにしても基地撤去、施政権の完全返還は同じく究極の目標となる。
- 3.そこで現実問題として復帰が具体的具体的に動いている段階に於ていかにあるべきか。それは基地撤去が直ちに具体化現実化しなればこの基地の出来た形式的過程に立ち帰って先ず基地を生んで施政権を先ず返還してもらいその地位に立脚して基地を整理

していく方法をとる以外に道はないと思う。これからすると施政権返還を優先すると考えてよい。

4.しかし復帰しさえすれば基地の態様はどうあってもかまわないとは云わない。本土と比較して差別のつけられているあらゆる条件、形式的条件実質的条件を復帰と共に取り除かれねばならないと思う。本土にしても米国にしてもそれぞれの考えはあろう。しかし沖縄側に立てばあくまで沖縄に特別なしわよせされたまま置かれる事は納得出来ない。

本土並ならば形式的にも制度的にも実質的にも同等同質の態様にせよといたい。少く共その方向性を施政権返還の時点においても明らかにしておいてもらいたい

5.そこでこの際沖縄基地の内容を点検してその内容を明らかにしておく必要はないか。

#### 安保と施政権返還

1.沖縄基地は安保の要めだと云われている。(自民党側の考え方)だから安保を破棄すれば自然に沖縄基地は要らなくなる。

2.アメリカが沖縄に固執しているのはこの基地を必要とする為である。ところでこの基地が不要になれば沖縄の施政権を掌握している必要はなく自然に施政権は返還されるであろう。

3.この様な考え方のシステムからすると安保破棄、基地撤去、施政権返還は一連の関係がある。

4.しかしきびしい現実を目を向けた時に安保破棄、したがって基地撤去はアジアの情勢が変り日本の政権が交代する時でなければ実現は不能である。われわれはこのきびしい現実を無視する事は出来ない。

5.本質的には安保—基地—復帰は重大な関係はあるがこの関係を追究して行って復帰の実現が出来ぬならばこの本質的の考え方にのみとらわれず、これらの関係を形式的関係におきかえてこれらの諸問題を解決していく外はないと思う。即ち復帰→基地→安保の順に行く。これは先ず形式的には行政権→米国→基地→安保に利用されたと考え、先ず施政権を返還を優先して考え形式的に生じてきたことがらをそれに足場において解決せしめていくという立場である。

#### 4につき加える事

基地の撤去、安保の破棄は自民党政権が考えをかえるか、社会党内閣が出来るか何れの時かでなければ不可能である。しかし何れの場合今の所見通しはたない。

11月1日

#### 11.1 参考メモ

##### 佐藤—ジョンソン会談

1.沖縄問題は極東の安全保障問題と不可分の形で取りあげられている。

2.日米安全保障条約の堅持が日米両国の基本政策。

3.日本の独立と平和確保、今日の経済繁栄と民政の安定、向上をもらたし福祉国家建設を実

現する基盤をきずいた。また将来の日本の安全と繁栄の為にも、安保体制堅持を必要ととく。

4. 社会党、1970—外交手続きにより安保廃棄。

5. 安保体制は米ソ冷戦時代の産物である。米ソ関係は冷戦→平和共存へ移行。

再検討期

6. ベトナム戦争終結後のアジア情勢の変化、米中関係打開へのアプローチ。

予想される変化に対応できる柔軟な姿勢。

7. 日本の平和と繁栄⇔安保⇔沖縄の立場

平和の評価

日米安保に依る一定の抑止効果

憲法 9 条を支えた国民の平和意志

非介入、非挑発を建前としてきた外交姿勢

去る大戦の悲劇の体験反省

→重なり合った保障

8. 極東の範囲

地理的には漠然とした抽象的概念。大体に於てフィリッピン以北ならび日本及びその周辺の地域、韓国、中華民国の支配下にある地域も含まれる。

9. アメリカ—沖縄で全面的施政権行使 核兵器の配備を含む軍事基地の自由使用—続けてきた根拠。対日平和条約 3 条であり日米安保条約とは別建ての形。

しかしアメリカの極東戦略—軍部的観点から安保と米軍基地は密接の関係。

10. 我国の防衛=核を含むアメリカの抑止力に依存。

その代償極東戦略に直結する米軍の駐留と基地の利用。日米の利益と義務のバランス→これが日米安保の背骨。

11. 沖縄を日米安保の一環ととらえる場合利益と義務のバランスからすると米国の受けている利益大。—米国が必要=極東の平和と安全 {無制限に基地を置き自由使用権行使

『屋良日誌 099』

1969.11.8

外務大臣へ

1. 3 回にわたる根まわし交渉に御礼。

前回に聞いた核抜き、本土並み自由使用、返還時期の見通し質す。

むつかしい問題については首脳会談で一括して声明におり込むとの事。

2. 沖縄側基地の態様について不明である為、不安と疑惑をもっている。その不安疑惑が解消されていく様折衝要請。

3. 経済対策に対する不安が解消する様な国内対策を確立する様に要求する。

4. 返還協定には沖縄の声が充分反映出来る様に要請する。

5.アメリカ上院の声に対する意見。沖縄の琉球議会や沖縄をつくる会の件、不快の感を表明する。

6.即時無条件全面返還の意味するもの。基地の容認出来ない事、安保に反対せざるを得ない事説明する。

◎高弁と対等の委員会をつくる構想

◎昭和 12、3 年の沖縄駐留の日本陸海軍の状態等発言された。

外相の答弁

1.返還交渉の内容は、すべて声明の中で出る。

個々の問題について、あれをどうする、これをどうするというのではなくて、まとめてワン・パッケージとして解決される。

2.沖縄の返還については、特別の条約的取り決めはしない。

従って核や自由使用等は当然認められない。

3.72 年返還、核抜き、本土並みの線は確保できるものと思う。

4.沖縄県民の主張する即時無条件全面返還の意義、気持ち、基地を容認しないという気持ちはよく理解している。

5.沖縄の基地は、整理縮小し、最終的には撤去されるものと思う。

6.返還交渉は沖縄県民の要望に沿う線を進める。

7.復帰をすれば、事前協議、地域協定等によって基地の自由使用はできない。

8.首脳会談後、返還までの間に、できるだけ完全な意味で国政参加を実現させたい。

読売新聞の小林さんの沖縄での提案は説得力があったと思う。高瀬大使の提案もあった。

私はそれに同感である。

高瀬大使は沖縄返還交渉妥結のお祝儀として本土と差別のない国政参加を認めるべきであると提案した。

9.国政参加問題は最悪の場合でも施政権返還時を停止条件として沖縄代表を選出し、復帰時点で自動的に本土並みの資格・権限が出るようにしたい。

10 復帰反対の動きに対しては、個人的感情としてはいやであり、遺憾である。しかし米国に対しては、経済不安の表れであり、復帰しても現在の儲けが減ることがないようにとの条件闘争の形でしかないと説明してある。

11.復帰準備としては、大使を中心として、高等弁務官と対等の資格で、沖縄に復帰準備委員会、本土に沖縄対策庁（特連の昇格）をつくり、準備もすすめていく計画である。

12.返還後の基地労働者の就労問題についても十分考えている。

13.米上院での沖縄返還決議問題については心配ないと思う。

かりに返還協定問題を米議会で取りあげても、批准されないことはないと思う。

また、政治的には議会の了解を必要とするが、法的には問題ない。

14.夢のような話であるが、昭和 12、3 年頃日本軍国はなやかまし頃、沖縄に陸海軍の基地がなかったことを今考えたりしている。

## 11.10 総理大臣

3,30分に木村副長官に会って相談し副長官に案内されて3,50分、総理に会う。

立会者 保利長官、木村副長官、山野特連局長

当方は糸洲局長を一緒にと思って木村さんに相談したがやはり総理も所信をのべるはずだから主席一人の方がよいとの事で応じた。

先ずはじめに

- ①八重山暴風見舞金に対する御礼
- ②復帰に対する熱意と努力に御礼し敬意を表す
- ③総理への訴えを読みあげる

それに対し

1.総理は安保反対に引っかかり再質問する。

そして主席の口から安保反対が出ては困ったという表情

2.後で保利長官も安保堅持で日本は栄えているからその中に沖縄を迎えたいのだと念をおしていた。私はきびしい現実は無視はできない事は知っていると言った。

3.総理は沖縄の復帰なくして日本の戦後は終らないと云った当人がアメリカに行って交渉する。

はじめは馬鹿ではないかとの声もあったがいよいよ最後の交渉には入るわけだが問題が非常に複雑であるので最後まで安心は出来ないと云っていた。しかし大体思う様な事が実現すると思うと云っていた。

4.勿論片々々々まで沖縄の云う通り出来るとは思わないが大綱としては県民が納得のいく結果が得られると信ずる。

とにかく佐藤は誠意を以て最後まで最善をつくす事を県民によく伝えてくれと念をおしていた。

5.訴え書はよくまとまっていると思うとも発言された。

6.復帰後の事が極めて大事である。特に要求する国政参加は大事と考えるので是非実現させたいものであると総理から積極的に話を切り出していた。今後の復帰協定事項にも県民の意志も充分反映させてもらいたいとの要望に対し、たがいに密接の連携を取りつつしっかりやっ行って行こうと二回も堅い握手を交して別れた。

7.木村副長官を通して嘉手納の決議、同盟の決議、予算要請等を手交する。

8.総理は最後までにこにこして余裕をもって聞いていた。そして言々句々毎にうなづいていたが只安保反対の表現に対しては言席から直接言われては困るとの感を強くいたいて居られる感じを私も強く受けた。特に保利官房長官は不快そうな顔をしていた。

9.後で記者会見。訴え書を配り若干の質問に答える。

『屋良日誌 025』

11月10日（月）晴〔佐藤首相へ最後の訴え〕

〔略〕いよいよ本番。三、三〇分木村副長官に会い、しばらく話し彼に案内されて総理に会う。立会者、官房長官、木村副長官、山野局長。当方は私一人であった。

はじめに暴風被害の金品の寄贈に御礼、復帰問題に対する努力に御礼。

直ちに訴え書を立って朗読する。態度は落ちつき払っていたと思う。読み終わってから総理から直ちに安保に対し再質問、私が安保に反対したのでは困ると云っていた。後で保利長官は日本は安保で栄えている、その安保の中に沖縄を迎えるのだと強調していた。私としてはきびしい現実は予想するので動じなかった。

総理としては最後まで不安はあるが大体思う様な事が実現出来ると思うと。また片々句々に沖縄の要望が実現するとは思わないが大綱としては納得の行く解決が出来ると思うと。佐藤は誠意を以て最善をつくすと伝えてくれと。

また訪米阻止に沖縄からは来ないかとの事をもうしていたが保利さんがこの方から出かけて行ってめいわくをかけているのだと話していた。総理は今後の対策、殊に国政参加の実現をしたいと表明していた。話しておきたい二、三の点があったが云い落したのは残念。沢山の内閣記者との会見を終り、一応十分ではなかったが大役を果たして帰る。〔略〕

11月19日（水）曇〔佐藤・ニクソン会談〕

〔略〕いよいよ佐藤、ニクソン会談はじまる。感無量。アポロ十二号も月着陸。十一時五五分から宇宙中継で会談歓迎の場放送を見る。果してどの様な結果が出るか、またどの様な反応があらわれるか一生一代の十字架遂に我が身にふりかかる日の始り、神よ県民の為に我を誤たしめ給うなど祈る気持で一杯。西日本新聞社写真を撮りに来る。夜は早くねる積りだったが十分ねつかれず。〔略〕ね苦しい一夜を過す。

11月20日（木）雨

朝早くサンケイ、時事の記者来訪。首脳会談の結果ムード的信息あり。七二年返還確実になった様子。建設的に和やかに会談は行われ、総理は終始澄み切った心境だった由。九時記者会見。続いて局長会議。之また困難でたまらぬ事ばかり。最早私の力の限界が来たかの様に見える。心がこんなに不安定では仕事も手につかず。今日、明日、明後日いかに切りぬけるか。〔略〕

11月21日（金）曇

〔略〕九時から共同声明発表後の談話、県民への訴え等原稿検討。喜屋武君、福地君、中村君、大島君集まって討議。いよいよ私の心境は明鏡止水の様である。大事な関頭に立って私の気持がかく落ち着いているのはよい成果が出る前兆だと思ふ。大島君に成文を託して討議終り。床屋へ行く。身も心も清めて一生一代の明朝の夜明けの声明に向う積りで

ある。一喜一憂なし。心の迷いなし。〔略〕

11月22日（土）曇

いよいよ運命を決する瞬間の始まり、一時半頃からワシントンからの宇宙中継始る。共同声明は南連事務局から二回にわたって届らる。一応目を通す。佐藤総理、愛知外相のコンミューケの大綱発表（木村）、総理の談話、愛知外相の記者団への説明。そこまですべて大体共同声明の内容も明らかとなる。こちらの声明文の内容にくい違う所は無いが、話し合う、大丈夫矛盾なしとの判断で声明文決定、アピールと共に印刷にうつる。八汐荘へは家内も一緒について来てくれた。

午前五時記者会見。三〇分声明文。アップール。質問を受ける。それからは分刻みで夕方六時までインタビュー。座談会、対談等続く。昨夜は一睡もしないがよく続いた。〔略〕大過なく大事な日を過ごす。やはり私は健康だ。よかったと思う。

11月25日（火）〔羽田での出迎えをキャンセル〕

局長会議、私の上京決る。与党各派、喜屋武会長に連絡する。しかし私の上京、一行羽田出迎えは皆反対。殊に出発直前与党各派六名抗議に見え、政府で復帰協の抗議もやわらかにあった。重苦しい空気で上京。出発前に記者会見。私の顔もこわばっていた事と思う。機上でも悩み考え続ける。末次氏、加藤参事官が迎えて下さる。新里、池原君が世話、赤坂プリムに泊る。夜はねむれなかった。出迎えについて飛鳥田市長から要望あり。

一晩中転々反側して考え、遂に羽田に行かぬ事に決定。その談話を書き、仲々ねつかれぬ、最も悩んだ一晩だった。

『屋良日誌 100』

11/27 午後4時～4時30分

総理官邸 木村官房副長官、加藤参事官、主席、宮城企画局長、大城秘書

- 共同声明は生き物ぢゃない。その読み方は安保と沖縄基地の役割、アジア状勢、事前協議の運用については、それはそれとして、復帰したら何ら差別がないようにしたいのが骨子になっている。
- これまではあまりにも沖縄にしわよせしたので、本土の沖縄化といわれても本土は少々しわよせするところに、沖縄と同様に苦しもうということになる
- 声明にはアジア状勢について記してあるが、将来の環境をよくするといったところにウエイトがおかれているから、声明書を被害盲想的に考えるのは、戦後の後遺症から脱却できんのではないか。
- 事前協議の弾力的運用等については、条約上の仕組みである。米国にも議会等があり、国民を説得する必要もあってあのような表現になっている。有事の核持込は絶対に拒否する。協議にかけるのは米国であるが、日本は Yes、か No を云う立場にある。

- 基地の縮少<sup>ママ</sup>等については、72年に帰るので、これからは正面きって交渉できる。72年まで待たずに整理縮少<sup>ママ</sup>に取り組みたい。佐藤総理とニクソン大統領との会談で整理縮少<sup>ママ</sup>について話した。
- メース B は近いうち撤去されるであろう。
- ベトナム戦争の終結の時期の見通しがついた。
- 他人を信頼せず疑心暗鬼ばかりでは、いったい何処を信頼するのか。ロシヤを信頼することでもあるまい。もっと建設的に考えるのが必要じゃないか
- 国政参加について…本会議の表決権も含めて本土と全く同じ資格で送り出せるようにしたい。その見通しは明るい。随時国会では困難と思うので、次の会議でやりたい。尚米国で確認してきた。
- 機構について  
代表者は両本国の代表であるので、復帰すれば沖縄も地方自治体なので、その意味から主席は顧問であるが、実質的には色濃くその意思が反映されるものである。
- 経済建て直しについては特命で大蔵省に指示する。
- 明 27 日閣僚会議でお米の件やその他の事について取り決める段取りになっている。

11 月 28 日

69.11.28 4.45→5.30

総理大臣、外務大臣へ

出迎え中止御賢察を願いたい。

1. 沖縄の念願の祖国復帰のめどをつけられるまでの御熱意と御努力、御苦勞に対して勤<sup>ママ</sup>んで敬意を表し感謝申し上げます。

また直ちに沖縄県民への御鄭重なごあいさつも誠に有難う御座いました。

2. ①その中に特に沖縄の経済復興とその建て直しについて責任を以て当って下さる御決意の表明、②国政参加の早期実現の御期待の表明、③復帰準備態勢のための政府機構を整えるとの御決意の表明、④沖縄県民の生活上の不安をなくするという御決意の表明。

即ち物質的にも精神的にも県民一人ひとりが幸福になる様な豊かな県づくりに努力して下さる御決意の表明等がありました。

是非その実現の程、宜しく御願ひ申しあげます。特に御功績の記念になる基礎的事業等の予算的措置願いたい。

3. いよいよ 72 年返還実現の運びとなり嬉しく存じますが御帰任当日の記者会見の質問にもありました様に共同声明に県民としてもやはり疑義があり、不安もありますので率直に申し上げます。

1. 核抜き、本土並み、72 年返還ということについて第 4 項と第 8 項から疑問がありますが、これは記者団の質問の解明にもありましたので理解いたしました。

2. 安保堅持ということと沖縄基地の要め的な密接な関係について基地にきびしい体験を

持つ県民は不安をもって居ります。この不安の解消に御努力いただきたいと思いますが、それに対する対策は？

3.これも記者質問にもありましたが沖縄基地の膨大な規模その密度と機能が固定化されていくとその被害、公害ならびにその社会経済的影響等に対する不安であります。今後の基地の整理縮<sup>ス</sup>少して撤去への方向づけ等が問題にされねばならないと思います。こう云った不安の対策は如何でありますか。

11.28 2.20-3 時

外務大臣

①核の問題

返還時には核は必ず撤去する。それは県民の確認出来るような処置をとるはずである。返還時以前にもその動きはあり得る。

②事前協議

自由発進、有事核持ち込み、B52 発進等、すべて本土並みになるので、なんら心配は要らない。

本土の安保体制の中に入るの、わざわざうたう必要はないけれども、強調するために特に取り上げた。

③ヴェトナム戦争に関連する協議は、72 年返還とは関係ない。アメリカの作戦行動を害わないということは、軍事的協力をいうのではない。

④ヴェトナム戦争の終結は、72 年返還時までには実現するものとの前提に立っているが、パリ会談等のこともあり、それを共同声明で明言することは出来ないとのことである。

⑤安保のカナメとしての沖縄基地の固定化については、今までは米国が一方向的に基地建設は出来たが返還後はそう云う事はあり得ない。米軍は漸次基地を縮小することがはっきりしており、軍部としては将来の見通しがついた以上、むしろわれわれの予想以上に急テンポで縮小するのではないかとさえ思われる。沖縄基地は復帰後は、漸次整理縮小の方向に向かうことは当然であるが、復帰を待たなくても、従来より遥かにその方向を推進し易くなる。

B52 の撤去についても、これまでも交渉しつづけて来たが、今後これも遥かに交渉がし易くなる。

⑥今回の交渉は、72 年核ぬき本土並み返還という大命題が中心であり、基地縮小の問題は相手の立場もあり、これ以上、具体的に言及することは出来なかった。根本的問題の解決をみた今は、基地縮小の問題はこれからも漸次おし進めてゆく。又、アメリカもその積りになっている。以上のこの様な事をうたえたのはぎりぎりの線だ。

⑦国政参加

既に一応とり上げられているが、改めて積極的に推し進める考えである。

⑧返還が決定した以上、一日も早く態勢を整えるために、本日の閣議で、沖縄復帰準備閣

僚協議会を設置することを決定した。71年中には準備を完了して、72年に入れば早々にも返還を実現したい。

- ⑨現地に設置する準備委員会には、日米両国代表による外交上の機関であるので、主席は形式的にはメンバーにはなれないけれども、実質的にはメンバーのような意味で顧問としてこれに発言し、沖縄側の意見を充分にとり入れたい。
- ⑩事前協議にはかるのは米の権利、yes、no、日<sup>ママ</sup>の権利。権利までは取りあげられない。

続 愛知外務大臣

- 1.日米両首脳会談では核の取扱いについては苦心したが、ニクソン大統領がもっとも強く返還時の核抜きを確約した。今後目に見えて核撤去の実績があがると思う。撤去の時期はい〔つ〕か分からない。
- 2.核については密約とか秘密取り決め文書、口頭とも絶対がない。米側も日本の立場をよく分って居り、岸首相とアイゼンハワー大統領の共同声明は生きている。但し核の持込みについて米側の事前協議の権利まで否定する事は安保条約を改定することにもなり、これはできない。だから米側の主張する権利についてまではふれなかったわけだ。しかし日本は核持込みを（米側が事前協議で主張しても）認めない方針なのでこの点安心してほしい。
- 3.B52 発進問題についてだが米国はベトナム戦争を止めようとして居り、現に努力している。だが米国側としては今 B52 を返還後の沖縄から発進させないと、はっきり云えない事情もある。
- 共同声明で（その時の情勢に照らし合わせて充分協議する）と云っているのは只日本側が相談に乗ってあげようと言う主旨のものだ。事前協議で yes を云う予約もしていない。返還後の沖縄から発進を認める様なことはない。
- 4.復帰後の沖縄基地の縮少<sup>ママ</sup>は充分可能性がある。米軍は返還する事に決ったので変り身の早さを見せるのではないか。

質 外相の説明はよく分った。只 B52 の発進とベトナム戦争の関係について疑念がある。

外相 米国内の事情は変化しつつある。また腹の中までは声明には書けないが全体を読んでもらえれば分る。戦闘作戦行動を予想するような事は書けない。政府としては国際緊張の解消が第一の急務であると考えて居り、沖縄については本土の中で本土と一体として考えて居る。

質問 万が一の場合二者択一にならないか。

外相 絶対にそう云う事はない。B52 の発進を認める様な事はない。

11/28 4:40~5:30

総理、床次、木村、鯨岡、山野、主席、企画局長

- 1.羽田出迎への事情説明し、その了解を求めた。

- 全く気にしない。お互い大小だ。歴史的な大事業をするために従来よりももっと緊密な連絡をとってなしとげよう。
- 総理は明々として、にこにこして流石は総理という感じをうけた。いろいろな立場があるからよく解る、といていた。
- 2.72年返還は間違いない。72年までには核基地を撤去する。  
自由使用もあり得ない。B52を含めての発進はあり得ない。以上のことを確認する。
- 3.ベトナム戦の問題で72年の返還が左右されることはない。だけれどベトナム戦争は終わっていると思う。それまで戦争は続かないと米国は言った程である。だけれど万一続いている場合は現実に基地を使用しているので当然そのことについて協議をせねばならぬ。その時でも、核の持ちこみ、自由発進等は許さないであろう。
- それでも不安は残るのぢゃないか。文面から不安残るといえば残る。外務大臣は軍事的協力はあり得ないといっているが、ニューアンスは異ると言ったら、木村副長官は中味は同じだ〔と〕答えた。
- 4.核基地撤去される時は米国側は県民にはっきりそれを理解できる処置を講ずるであろうと外務大臣は言っていたが、その通りですかと質問したら、その通りだと思う。
- 5.沖縄の基地の安保の要的価値は復帰すれば先ず第一に核基地がなくなる。第二に自由使用ができなくなる。第三が段々縮少されることによって段々その価値は低下してゆくであろう。従って沖縄基地はめどがついたから質も変り、性格も変り縮少され密度も薄れてゆくであろう。  
復帰するまでもなく基地は整理縮少されやすくなる。
- 6.基地が現状固定化してゆく場合に基地から生ずる被害公害、社会的不安、経済的不安は行政的に処置されて（国の責任において、強く）ゆくであろう。
- 7.復帰という歴史的な事業を記念するために一番基礎になるような事業をしてもらいたい。たちおくらしている産業経済の基礎基盤の整備と社会資本の充実、例えば道路、港湾、水資源の開発等に思い切って財政支出をしてもらいたい。  
総務長官とも数字的に諸計画を話し合いなさいと言った。長官と副長官はそれも考えて今度の予算はやった積りであるといっていたが、主席はそれに更に追加して考えてもらいたいと要望した。

## 『屋良日誌 025』

11月27日（木）晴

〔略〕四時に木村官房副長官に会う。昨日羽田に出向え得なかった事を詫び、この度の復帰問題の処理についての御努力に感謝。総理の云われた沖縄の生活を豊かにする、豊かな沖縄県づくりに努力する事を話された通りその実現を要請、予算問題については総理の特命で大蔵に指示する由話された。その他前向きに協力し合う様に話して居られた。〔略〕

11月28日（金）晴

〔略〕愛知外相、気持良く会って下さる。分りやすくよい話を聞いた。私も云うべき事は云った。総理大臣も気持良く会って下さった。総務長官、木村副長官、鯨岡副長官、特連局長立ち合い。宮城企画局長と二人で会う。大変有意義な会合だった。私も云うべき事を云い、感謝すべき事を感謝し、頼むべき事を頼み、疑問不安の点は質し、対策を聞き確認をすべきものはした。愛知さんと四十分、二時二十分から三時。総理は四時四十分より五時半にわたる話であった。終始友好的に行われた。終っての記者会見も何とか切りぬけた。之で完全に目的は達成した。〔略〕

### 【1970年—安保期限切れについての所見—】

『屋良日誌 084』

1970年6月22日

安保期限切れについて

1.私としては県民福祉を最優先に考える立場から県民に数限りない被害、公害を与え、そして強い不安と不満をいだかせ、さらに自主的な沖縄の社会、経済、各分野の発展に隘路になっている基地の存在には反対である。

ところで、この日米安保条約では沖縄の基地が最も大事な要石となるといわれており、安保を堅持するということは沖縄の基地をさらに維持していくということにつながる。したがって私は基地に反対する立場から安保にも反対の立場を取らざるを得ない。これは長い間の基地体験からくる私の実感である。

しかるにその安保が10年間の期限が切れ、反対廃棄の運動があるにもかかわらず自動延長されていくということは誠に残念であるとともに、国際間の問題や、その中にまきこまれている沖縄基地の現実的きびしさをひしひしと痛感する。

2.ところできびしい現実にかかわらず、沖縄の復帰の時期も、そのきびしい中で刻々と迫ってくるが、この道は自動延長という新しい状態をかかえ、基地の態様も不明のままに打開されていかねばならない復帰への道である。それを思うと基地の態様が不明なだけにいよいよきびしさを加え、困難と不安を伴うのではないかと思う。だが開拓されていかねばならない宿命的課題であるので、決意を固めて当っていかねばならないと思う。

3.ところで自動延長する安保はこれからは期限はない。これの措置については弾力性がある。したがって今後は国民の安保に対する考え方によってその将来は左右されるであろう。国民の考え方も具体的な四囲の情勢の変化、時勢の進展によって安保の受け止め方やそれに対する評価も変わってくるのではないかと思う。そうした時にその価値は私としては減少していくのではないかと思う。こうして国民が真剣に考えれば恐らく安保は解消の方向を辿る可能性がより大きくでてくるのではないかと思う。私は強くそれを念願する。

しかし私はいかなる時にも県民福祉の焦点の上にとって安保を考え見守っていききたい。この一貫した姿勢を堅持して全県民ともに、沖縄の実体、実情に即して真剣に考えをまとめ、

再び沖縄に特別に危険や不安、被害や公害等のしわ寄せがないように対処し、沖縄の立場を率直に主張、要求していきたい。

### 【1971年—毒ガス移送、沖縄返還協定調印、強行採決—】

1971年

『屋良日誌 073』

第2次毒ガス移送について

〔略〕

13.道路建設費は軍は一文も負担出来ぬ、と云う。これについて高瀬大使、吉岡公使、対策庁本部、沖縄事務局の間にごたごたがあった。皆、私の考えを充分理解し得ない所から起きたいざこざであった。対策庁の事務当局は道路建設費は筋が通らぬ、と云い、大使筋は本土政府に出させる心構えであり、いったい琉球政府は何を考えているのかとの事で文句があった。わけのわからぬ事であったので大使の言葉も対策庁の申し出も私は大して気にはしなかった。

山中大臣とは電話でも話し合い、私としては移送に要する経費は一義的にはすべて移送責任者である米政府が負担すべきであり、それがどうしても不可能な時は本土政府に御願いしなければならないと考えていた。総務長官も全く同感であるとの事であった。ところでコースの建設費は米国には予算はない。全額本土政府に出してもらいたいとの事。

14.私は4月25日上京する。

移送ルート建設費20万弗、全額支出を山中長官に要請する。長官はかつて半額は負担してもよいと発言されたこともあり、半額なら問題はなかったかも知れないが全額という所に問題があった。その金額についても問題があったが、他にその金額を長官は調整金から出そうと考えて居られた。調整金からは困ると私は云った。調整金は全軍労の不時の支出や天災地変の救済費としての予備費であり、而も琉政の予算から基地内道路の建設に出す事は沖縄の政治情勢から絶対に許されない。若し出すとすれば仮に出しておいて将来その分丈、予備費から補えば可いと私は主張した。大臣は取りあえず出しておいて調整費が将来不足したら不足の分だけ予備費から補うようにしたいとのべて居られた。

4月26日2時→3時45分まで話したが結論は出ず、5時→6時30分の二回会合を持ち、大臣が再三にわたって福田大蔵大臣に電話で遂に予備費から20万弗支出すると決定。これは山中大臣でなければ出来ぬ芸当であった。大成功。なお、その他補償費等、諸経費は移送後、具体的実績に照らして私と話し合いをする。くわしくは本土政府で責任を以て支出すると云う事だ、とまでの言質をもらった。それで移送ルートをはじめとする諸経費も見通しがついたので、私は4月27日には帰任する。〔略〕

19.かくて私はS46、7月8日に上京す。そして9日（金）11時→1時半頃まで山中総務長官と話し、この経費について支出方、懇請す。アメリカ側に出す意志がない事を報告。大臣もそれを了解し、外交折衝しても無駄だと云って居られた。

第一回の会談では結論が出ず、翌 10 日 11 時から再び会談続行した。大臣は深い理解を示された。

里君がつめた事務段階では①警備費の事務経費、②代替道路建設費、③電話架設費、④補償費の中で②と④しか出せぬとの事であったそうだが、大臣との話し合いの中から①②③④全部負担し、全額支出を約束された。有りがたい大成功だった。要求全額負担となり、心から大臣の好意ある協力処置に感謝し、事務所に帰り直ちに副主席に連絡、その前に大臣と立ち会い、大臣から記者会見、この事は電波に乗って沖縄に流れた。とにかく成功 100%。

なお、休業補償については実績をふまえて話し合いをする事にする。

この前の道路建設費の 20 万弗と云い、この度の 36 万弗と云い、山中大臣なればこそ出来た事であり、その点から云って 5 日の山中大臣の留任は私にとっては誠に点からの福音だったと云えよう。若し山中大臣でなければ不可能であったと思う。〔略〕

#### 『屋良日誌 074』

#### 7.9 7.10 山中総務長官

##### 毒ガス移送対策について

①7 月 15 日から移送開始される毒ガス撤去にあたっては経費についても一切の責任は米軍が負うべきであるが、しかし琉球政府も住民にいささかの被害も及ぼさぬよう完全な安全を確保する為万善の対策を講ずる必要がある。その為に多額の支出を余儀なくされている。さらに移送沿線の住民に生活上の不便、精神的苦痛に対し補償を考えねばならない。その為の経費はじめ、いっさいの経費は米軍が全責任を負うべきであるとして強力の折衝をしてきたが見通しがたたないので致し方なく、本土政府に対しその資金支出について協力を要請した。

警備に要する経費 63,388 弗

代替道路に要する経費 11,860 弗

臨時電話に要する経費 4,916 弗

関係地域に他する協力要請に要する経費 280,264 弗

合計 360,433 弗

②琉球政府のこの要請に対し山中大臣は 7.9、7.10 両日にわたって長時間検討された結果、毒ガス撤去課題を解決すると云う目的の為に全面的に了承された。しかし一部経費については関係部落の共同の福祉施設の建設の為に使用するようにとの意見があったので琉球政府としてはこの面も考慮して関係市村並びに区民の方々と協議していきたいと考えている。

また休業補償の要求については之は移送して見なければ具体的に予算もつukれないので具体的の実績をふまえて、総務長官と話し合っていく事にしてある。その事は確約された。これらの諸経費は移送完了後直ちに支払いが出来る様手続きを進めたいと考えている。

なお、第一次移送の際に関係地域住民にめいわくをかけている為に慰謝費と支払われる経費については早急に処理したいと考えている。

③以上のとおり本土政府のご協力が得られたので関係市村並びに地域住民のご協力を得て一日も早く毒ガスの安全且完全に撤去出来るよう希望するものである。

### 『屋良日誌 028』

6月17日（木）晴〔返還協定調印〕

〔略〕宇宙中継の返還協定署名の実況を見る。涙がにじんだ事は事実。遂に来るべき日が来た。しかしその内容については非常に不安、憂うべき事、不満の事がある。平和憲法のもと平和な国の保障を受けて生活が出来る所に意義があるのに平和憲法とは関係のない米国の戦略的強烈な基〔地〕の中生活を強いられる事はたしかに理不尽であり憤懣にたえない。これは考えれば考える程不満である。

しかしこの協定に依って復帰する。復帰処理をいかにするか。この憤懣<sup>ママ</sup>の対策をどう考えるか。運命とは云え、ここに又問題を背負い込んでまたまた茨の道、針の山は続く。非運<sup>ママ</sup>の沖縄。非運とは云え運命の僕である。

### 『屋良日誌 029』

11月17日（水）雨〔返還協定強行採決〕

十一時まで内で出発準備する。今日は家内も同行する。

十一時十五分革新市長団国保拒否せよと要求。

記者会見 四五分、自民党議員団国保承認せよと要請。

東京へ出発。社会党はじめ見送り人多し。三時過羽田つく。警視庁の警部三、四名ボディガードに来てもらって居た。羽田にも記者一杯。直ぐ乗車して東急へ。東急玄関でマイクをつきつけられ返還協定が強行採決された事を知らされる。あ然とする。

何と云ってよいか言葉も出ない。しばらく黙考する。皆室屋に集る。副主席と電話する。

記者会見する。後で八〇一号室で前田、宮里外同行者と懇談する。

何の為に上京して来たか分からない。室屋内にも記者はつめ寄り本館十四階の広間で記者会見をする。どうせ協定はこの運命を辿らねばならなかつたらう。

せめて建議書を手交でも出来て居たらと思ったが後の祭りだった。

要は党利党略の為には、沖縄県民の気持ちというのは全くへいり〔弊履〕のようにふみにじられるものだ。沖縄問題を考える彼等の態度行動の象徴であるやり方だ。

11月18日（木）曇

昨夜はふっと眼がさめると東京だと思い今日からの行動に心も暗くなる思い。八時から安里、瀬長、喜屋武議員と朝食懇談会。安里さん釈然としない様子だった。十一時、総務長官に会う。十二時半頃まで話す。建議書は既に読んで居られた。私の気持ちは分かっ

でもらえたはず。議長方に会う前に総理に会った方がよいとの判断で電話連絡、一時半に山中長官の案内で会うことになる。はじめは渋って居られた様だ。

建議書の外に第四雇用者の陳情書、毒ガス撤去の時の休業補償の件、差損補償の件等話し合う。

昼食を総理府の食堂でとり、一時半から約三十分総理に会い、最高責任者たる総理に昨日の無茶な強行採決に抗議し今後沖縄問題については責任をもってその不安、疑惑に伝えてくれと強く要請する。沖縄を戦争の危険にさらす様な事は絶対にないと云って居られた。二時から河野参議長、追って副議長に今後の審議に慎重にと要請。少く共衆議院の様な事はしないとの事。与野党話し合っているとの事であった。次は船田衆議院議長に対しては強く不満と抗議の意を表明する。最早決議をさし戻すことは出来ない。今後本会議等において沖縄出身議員にも質問の機会を与えたいとの事。四時に次は安井参議院返協委員長、池田沖特対委員長に会って要請。四時半から福田外務大臣に核兵器は必ずなくなると全責任をもつ、沖縄基地の自由発進も絶対にさせない事、責任を持つと断言。総理も事前協議についてその様な事は NO と云う事断言された。

五時半から記者会見。一応事務所に行って夕食。七時半頃帰る。幸昌君、昭彦君やってくる。十一時過ぎに幸昌君は帰り昭彦は泊ることとなる。

今日は一度に全主脳に会う。しかし何が得られたかは疑問。しかし沖縄の良識や心は伝えた積りである。真剣にやっても無意義な事はないだろう。結局このような成り行きしか辿れなかったのだろう。

12月1日（水）曇　〔主席に就任して3年〕

〔略〕夢の間に三年は絶った。三カ年の苦悩は無駄ではなかった。その間に大事件が起こったが運命決定事項としては

復帰実現の見通しがつき準備具体化、国政参加実現、本土政府予算の質的転換量的拡大、復帰準備具体化、B52 撤去実現、毒ガス撤去実現等々。何れも歴史的な大事件のみである。

### 【1972年—日本復帰—】

1972年1月1日（土）晴

九時一十五分聖火見送り。空港。私は万才三唱の音頭をとる。いよいよ、復帰当年を迎えた。今年に復帰する。アメリカの施政下最後の元旦だと思った時には人知れず感深いものを感じた。これは空港歓迎式での感じであった。復帰の内容はともかくとして終戦来今日までの歩みがすべて復帰の基盤的運動でありその準備であった。私が今復帰最後の準備をすすめて来て、遂に主なる案件は大体整えられて復帰当年を迎えた四七年元旦である。無量の感慨湧き出づるを禁じ得ず。又私の来し方の歩みと現在の立場と此の時期を思い合わせた時、人の世の運命と云うのを感じざるを得なかった。数年前までのこの運命のめぐり合わせを誰が感じ得ただろう。〔略〕

1月5日(水)曇後雨 [佐藤と会談]

九時過ぎ出る。九時三十分山中長官に会ってしばらく懇談しその後九、四〇分長官の案内で佐藤総理に会う。総理はにこにこして愛想良し。返還期は出来得れば四月一日要求、核抜き確認の件、基地の整理縮小の件、強く折衝方要請。総理は四月一日主張すると云って居られた。しかし核兵器撤去が出来なければのびるかもしれないと、外相の意見とはかみ合わない。おくれる原因が異なっている。通貨問題については米側と話し合わねばならぬだろうと。これも外相が議題にはなっていないと云う事とかみ合わない。国内で処理出来る緊急対策については事務当局に検討させるべく指示してくれと頼んだら指示すると云われた。[略]

1月8日(土)曇 [佐藤・ニクソン会談—5月15日に決定]

六時まで八汐荘ホール。佐藤—ニクソン共同声明テレビで見る。各局長も一緒する。七時から八時テレビを見る。感興も湧かず。返還期日は五月十五日決定。その他変わった事なし。いよいよ返還が完全実現することとなる。やはり感慨深し。終戦二七年一途に復帰を地道に堅実に願い続けてきた私にとっては自分が主席時代に責任者になって立ち会う。やはり沖縄の歴史にも私の人生にも運命というものがあると実感する。かくて復帰は刻一刻と足音高く、近づいてくる。[略]

1月10日(月)晴 [佐藤首相を羽田にて出迎え]

[略] 二時半から羽田へ総理一行を迎えに行く。沖縄側も星さんはじめ経済人代表者迎えに見えて居た。定時着。山中長官とも会い、あいさつ。一緒に迎えに出る。久し振りに愛知外相にも会う。報道人から前にも出てもらい度いとこの事で前愛知外相と並んで立っていた。山中大臣がつれに來られてずっと前の方に立たされた。山中大臣と並んで立つ。総理と握手。精一杯やって来たがあれだけの結果だとけんきょな挨拶だった。御苦労さまでした、有りがとうございましたと挨拶を交した。報道人立ち乍らインタビュー。歓迎式には後方で環境庁長官と話して居ながらステートメントを聞く。

飛行機の音でよく聞きとれず。保利幹事長歓迎のあいさつ。船田議長万才三唱。その次に沖縄経済人から花たばの贈呈あり。終ってから突然屋良主席のあいさつを指名され戸迷う。人の波をかきわけて出てあいさつする。五分位のあいさつだったと思う。こうならば前以て連絡してくれたらよかったのと思った。何とかあいさつをして引き下る。総理への義理も何と〔か〕 たったと思う。山中長官も大喜び。仕事も仕安くなったと喜んで居られた。[略]

1月11日(火)雨

[略] 十二時頃か山中総務長官に会って経過を拝聴、質疑を質す。大体に於いて目的は達成された予算だと思ふ。総理府一括計上の予算七七二億位いつている。山中長案も大満

足の態だった。ほんとに有りがたい救われた思いだ。〔略〕

1月19日（水）晴 〔知事選出馬の決意〕

〔略〕五〔時〕、革新共闘幹事会、知事候補決意表明要請。

七時頃まで話す。ここまで追い込まれて来ては受諾する以外に道はない。解放しれもらえれば私としては好都合であり、公職をしりぞくよい花道であると思う。復帰という大事業が曲りなりにも一段落ついた。たえず復帰を念じその基盤造りに人生の大半を消費してきた私がめずらしく主席の地位に立たされ沖縄側の復帰の責任者となる。これも運命。ここで歴史の区画がついたからもう退いてよい潮時だと思いがしかし意のままにならぬ。沖縄の歴史始まって以来の初代の公選主長となってこの難事業に取り組む。そして一段落ついた。次に知事選の難事業がひかえている。〔略〕

1月20日（木）晴 〔植樹祭天皇来沖要請〕

〔略〕一〇～一二 定例局長会議。植樹祭天皇皇后両陛下の御来県。瀬長君から慎重論の発言があり。大浜先生、吉田氏との意見と同じ。独走しない様に考えていきたい。〔略〕

1月25日（火）晴

〔略〕十時から十一時海洋万博発起人会。今日の会合にはどうしても地元の主席として欠席するわけにはいかなかったと感じた。復帰が五月十五日と決つていよいよ復帰の切実感を味わった様に今日の会合でいよいよ万博が現実の問題として身に迫った感じである。

〔略〕昼後は事務所で植樹祭の天皇皇后両陛下の行幸奏請の件で四苦八苦。懊悩苦闘する。従来の難問より更に難題である。総務局長からも与党運営委で反対の意志の伝えあり。家内からもその件一婦人からの手紙の報せあり。二転三転して昼中は過ぎる。〔略〕

七時半に事務所に帰る。副主席からの電話あり。八重山からである。やはり行啓奏請せざるをえないから決意して奏請してくれとの事であった。引続き総務局長に電話。崎浜議員から与党の意志を伝えて来た。奏請反対であるので此の際行啓を辞退してくれとの事であった。苦しい目に会うものだ。〔略〕

11月26日（木）晴

十時半から山中大臣に会見する。はじめは単独会見する。はじめは単独会見する。

植樹祭の時の天皇皇后両陛下の行幸路の件、万博の件、知事立候補の件を二人丈で話し、後で毒ガス撤去の後始末の件、大島君と一緒に話し営業補償はじめ二件について大島君と事務官との間に話し合わす様合意する。

天皇皇后の奏請についての沖縄の情勢を説明しそれに対する対策を話し合う。一応私が植樹祭国体二回の行幸啓を奏請し山中長官から根まわしをしてもらって出来る丈その中の一つ、体育大会の時の御出でを願ったらと話し合った。そう出来れば幸であると思つて御

配慮を御願する。差損補償十三億決定との事。大臣と同席記者会見する。宮内省の件は一切ノーコメントする。事務所に引きあげる。大嶺所長は国土緑化対策本部に宮内省に奏請に行く事について照会に行く。これは徳川議長<sup>マツ</sup>と主席とで行くとの事。ところで徳川議長は皇太神宮の宮司であって何うに居られて急には上京出来ぬとの事。

二月になると札幌オリンピックのために宮内省は二月八日頃まで不在。徳川議長はまた二月八日頃までしか東京におれぬとの事。

結局徳川議長同伴で宮内省行きは二月八日以降との事。なお、手続きは極めて面倒。

事務局長が宮内省で根まわしもしなければならぬとの事。今日宮内省行きが出来なかったことは幸であった。

新垣総務局長からの連絡で沖縄での天皇皇后を迎える事についての反対運動は大変との事。高教組実力阻止決定。県労協も同じ。沖教祖からも警告があった由。夜県労協からは物すごい電報が来てショックを受けた。これでは立候補はおそらく断念せざるを得まい。  
〔略〕

1月27日（木）晴

八時出発、十時頃羽田発、十二時四〇分那覇着く。

一時半記者会見。両陛下の行幸啓奏請の件質問の焦点となる。頭のいたい問題である。どうして切りぬけていくか従来にもまして大問題としてのしかかってくる。〔略〕

海洋万博の用地の決定、天皇皇后の御迎への件大変な難事業となった。

二大行事いざ実施となると具体的に次々困難があらわれる。国家的行事というのも容易ではない。

2月21日（月）晴 〔ニクソン訪中〕

〔略〕一時半から公舎でニクソン大統領中国訪問到着歓迎の場面を宇宙中継で見る。正に世界歴史の歴史的瞬間であり、歴史的大事件であった。私は緊張していた。その成果は沖縄の運命とも深い関係をもつからである。

周首相一行が出迎え非常に友好裡な出迎えであった。儀仗兵が両国国家吹奏し閲兵があった。この友好的迎へのシーンが友好的な話し合いにつながれば良いが。これが米中のわだかまりが解け緊張緩和と平和をもたらす事になればと念願し又祈るものである。私も非常に緊張して見守った。〔略〕

『屋良日誌 030』

5月14日（日）雨 〔日付が変わり沖縄県になる瞬間〕

〔略〕復帰の時間は後十分、後五分、後一人、秒読みにうつり遂に十二時サイレン。キ

---

<sup>61</sup> 徳川宗敬（1897-1989）か。貴族院副議長、参議院緑風会議員総会議長、伊勢神宮大宮司、国土緑化推進委員会などを歴任。

テキは聞えなかった。

遂に復帰は実現した。感慨殊の外に深いが実感が湧かない。私は遂に主席から知事になった。知事となり一路県庁知事室に戻る。一時間位もかかったか。あいさつ、議会開会準備のなすべき署名、日中の日程を打ち合わせて内へ帰る。三時頃になっていたと思う。もう沖縄県になり公舎は知事官舎に代わっている。早速寝につき、五時半に起きる。徹夜と思ったが、二時間位はねむった。最十五日になっている。

#### 5月15日（月）雨〔復帰の日〕

昨夜来雨は止まない。軽く朝食をかき込み、六時半に登庁。すぐ初県〔議〕会場に出席、あいさつ。議案を一括提案して戻る。七時二〇分 RBC、これは市民会館の玄関であった。続いてNHKの一〇二番組のインタビュー。それが終わって県庁に帰り庁舎の標札を取りかえる式に立ち会い、長い間はりつけられていた標札も遂に撤去、文化財委員会委員大城立裕氏<sup>62</sup>にそれを托し次に県庁門札の除幕式に出席す。除幕に立ち会った児童の一人は正子であった。終って記念植樹。県庁の行事も終り市民会館に向う。車が混みひやひやした。

十時五分頃に公舎に帰り家内を案内して市民会館に向う。私はひかえ室には入り家内は直ちに会場に入場す。ひかえ室でしばらく待ち、山中長官に案内されてステージに上り向って左側に来賓右側に本土政府側。

先ずしばらく待つ。東京の記念式典から君代斉唱が流れ、佐藤総理の感激のあいさつあり。その後に天皇の御言葉を聞き、その後に黙禱しそれから沖縄における国の記念式典の本番には入る。

山中長官の総理大臣代理あいさつ、その後に私のあいさつ、星さんのあいさつ。それから衆院代表床次先生、参院代表長谷川仁氏、最高裁代理あいさつ。米国沖縄駐在の総領事のあいさつあって万才三唱の後、国の式典は終り、一応閉式。ひかえ室に戻り昼食。会場には午後の式典の為に居残ると思ったが殆ど出払ってしまって心配する。午前の国の式典には革新系議員等は欠席。まったく子供見た様に思う。そう云う事があったから午後は保守的人々は参加しない現象があらわれはしないかと私は大変心配になる。〇時半から古典芸能の鑑賞会あり、皆さんを案内してみてもらう。七番出たが一流の人々のみの出演で皆感動して居られた。この計画は上首尾であった。はじめは空席が多く私の不安は一段と増す。一時四〇分頃に終り一応ひかえ室に戻り、二時に来賓案内入場した時は一杯席は埋り段々来場遂には満員。午前の式典をはるかにしのぐ満員振りにやっと安堵の胸をなでおどす。中央壇上に梯梧の造花の花を盛りありあげ盛観。ステージの様子は国の場合よりけんらんなものがあった。君代斉唱はなかったが開会の前後の立楽は壮大ですばらしかった。あの音楽は迫水秘書官も絶賛していた。県の発足式典は花はサンゴ礁を両側にして中央に梯梧の花を一杯盛り国旗は客席から向って左側にかざり、中央にはスローガンをかざり右

<sup>62</sup> 大城立裕（1925-）。作家。『カクテルパーティー』で沖縄初の芥川賞受賞。海洋博協会事業計画委員会委員、沖縄県立博物館館長など文化行政にも積極的に関わった。

側には県章がかざられ、式中或時期に明りを消して照明で県章を照らしそして県歌の発表等ユニークなアイデアが織りこまれて演出は100%良かった。更に私が良かったと思ったのは県の式典には参加者一階の如きは超満員で熱気溢れている事であった。私の琉球政府解散と沖縄の発足宣言も非常に力強くなされたと思うし引続いての私の式辞も熱血たぎり燃ゆる様な情熱によしやるぞと云う闘志が万身から湧いた。非常に力強かったの印象を聴衆否全県民に与えたようだ。星議長のあいさつ、山中長官の祝辞、衆院代表床次先生、参院代表長谷川先生、最高裁長官の代理あいさつ、全国知事会代表佐賀県知事、九州知事会代表福岡県亀井知事あいさつ、最後に沖縄市町村会長平良那覇市長のあいさつですべては終る。

次は第二大ホールで祝賀レセプション。超満員であった。こんな盛大圧巻なレセプションは空前にして絶後であろうと思う。レセプション中におどりも面白かった。美濃部東京都知事も見え、午後の大会の始る前に館長室で御目にかかりあいさつ。それからレセプションの最中も御目にかかる。ゆっくり御つき合いの出来なかった事は残念。その後四、三〇分から大会場のステージで合同記者会見。それも無事に終り、開発金融公庫の発足式典、その後レセプション。その後にRBC 稲福さんとテレビ対談。六時にNHK前田会長、公舎来訪表敬あり。それが終り七時から山中長官夫妻を那覇に迎えて私共夫婦でかつてない歴史的夕食会を催す。十時頃まで非常に楽しく語り、心から御礼感謝をのべ芸能を鑑賞し一日の幕を閉じる。途中で上江洲文子さんが自民党の友寄さんが一分間でよいから会いたいと申し出たが場所が違うと拒否して居られた。流石である。

今日は二時間位しか休んでいない上に長い間の緊張の連続も重なっていたので疲れも出たはずだが何のつかれもなく何の支障もなく無事にこの世紀の大行事を終る事が出来た。安心した。はじめて開放された。沖縄県が生まれた喜び、今までの心配事から開放された喜び、沖縄の歴史の前後に只一回しかない頂点に到達し無事に乗り越えた喜びが錯綜し戦後二度目の喜びにめぐり合った。かくて今日から主席ではなく沖縄県知事となった。而も初代知事になった。歴史的一日の幕を閉じた。終戦以来復帰を希求し且必ず実現するとの大前提に立ってその準備にそなえて一仕事、一仕事を地道に計画し実践して来た。私に天はその復帰のめぐりを完成させた。運命のめぐり合わせと云おうか。

私の運命でもあり沖縄の運命でもあったのではないか。私が全く無私没我の状態での難苦行にさいなまれて来た。しかし私は心身共完全健康も維持して来た。われに神仏の加護があったと信ずる。

5月17日（水）快晴 〔佐藤首相と面会〕

九時に兵庫の副知事表敬。久留米の馬場夫人外表敬。

県庁標札前でNHKインタビュー。副知事帰任連絡十時半、合同記者会見。物価問題や上京の件について。大急ぎで公舎へ帰り着がえて飛行場へ。パスポートなしではじめて上京。嬉しかった。感激し復帰の実現性をかみしめた。何よりの感激だった。十五、十六日

の日誌を飛行中に整理する。今日からは全く生れ代った様に気も心も晴れて自信に充ちていた。

神山先生も知事室に見えていた。涙がでる程、感に打たれた。

無事予定の時間に羽田着く。国内空港につくのも沖縄からははじめてである。マスコミ数名は見えて居ったがまとまっていないので総理会見後に首相官邸で合わせて会見する事にした。税関も通らずに直ぐ外に出る。只只うれしく開放されたと云う喜びをかみしめた。赤嶺さんはじめ夫人の方々十名位迎えて下さって花束の贈呈ありで大変にぎやかな知事初上京のにぎわいだった。

県人会の山城事務局長、東京事務所の皆さんも迎えて下さる。

直ちにホテル東急に行つて準備。四時に官邸に。総理に会見。

にこやかに迎えて下さる。

しばらく写真のフラッシュをあびて室には入り、二人丈で話す。

復帰実現の御礼、沖縄式典の御経過等報告。

ドル交換に起因してか物価の値上りさわぎの実情等話し、通貨交換とレートとの関係を糾明していくのでその節引続き本土政府に協力方を求めねばならぬ事もあるので協力頼むと依頼する。大いに甘えてくれと充分協力の姿勢を示して下さった。

復帰はしたが御承知の様なむつかしい諸問題をかかえているので復帰後の解決にも協力を依頼した。特に核抜きに対する不安を訴える。それに対しては大統領と総理との約束である以上、それを信頼してもらふ外はない、国務長官から外務大臣宛に核撤去されたとの公文も届いている以上、一応それを信頼してもらい若し疑わしい事があつたらその時は対策を講ずると云う事以外はないのではないか、要するに何か疑わしい事があつたら方法を考えると云うに止る。措置なし。ベトナム戦争の終らない今日、自由発進基地になる恐れを訴える。それに対しては事前協議に依つて絶対に自由発進は許さない。そう云う事はあり得ないと断言された。只心配だったのは若しベトナム戦争の関係で復帰の延期と云う事が起りはしないかとの強い心配があつたと述懐して居られた。そう云う事がなくて安心したと。その他新生沖縄づくり社会立て直し、経済開発等に今後の協力要請に対し、たがいに力を合わせて努力しようと握手する。

いつでもよいから訪ねてきて話してくれと、そして甘えてもらえる気持ちは充分だと断言して居られた。

最後に新生沖縄づくりに県民も希望をもって頑張ってくれ、国としては最善をつくすと結ばれた。その後合同記者会見。そこではメッセージを送り、総理との会見経過を話す。〔略〕

5月18日(木) 晴〔園遊会に参加〕

〔略〕一時半、園遊会に出発。午前中家内の友人城間さん永山さん来訪。

園遊会は前回通り宮内省の係り官の案内で私には陛下が話しかけられるとの事で所定の

場所を指定さる。森戸先生<sup>63</sup>夫妻も指定され前回同様になった。カメラの焦点になって五名の人に直接御声がかかりがあるとの事。森戸先生に始り私は四番目であった。

私の前に来られた天皇は沖縄の復帰を喜ばしく思う、良かったですねと話しかけられた。私は用意してあった言葉を一気に申し上げた。「二七年振りに復帰した沖縄県知事屋良朝苗であります。陛下には長い間、常に沖縄復帰を御気に止めていただいて有がとうございました。御かけ様で去る五月十五日念願の復帰は実現しました。私一生の感激でございます。つきましては今後は新生沖縄づくりに全県民心を合わせて最善の努力をいたします」と申し上げた。

陛下は今後平和な幸せな沖縄をつくりあげていって下さいと云って居られた。皇后陛下もにこっと会釈。天皇も笑顔で応待して居られた。続いて皇太子も復帰を喜ばれて御声があった。これから又むつかしい問題もあろうが頑張ってもらいたいと云う意味の話があった。私も御関心に御礼をのべ少年会館の事も一言ふれておいた。美智子殿下はしみじみと長い間ご苦労様でした、大変だったでしょうと心からねぎらいの御言葉が私にも家内にものべて居られた。何となく強くだき取る庶民の言葉が感じられた。心なしか美智子殿下はうつむき勝ちで話して居られる様に思った。つづいてひたち宮夫妻も一寸復帰問題についてあいさつがあり私も一言有りがとうとのべた様に思う。秩父妃殿下もしみじみ御苦労さまでした、大変苦労された事でしょうと心からのねぎらいと励しの言葉があった。高松宮殿下も同様復帰を喜ばれ労をねぎらい励ましの言葉があり、最後にこれはビジネスだがとライ予防の話をされ東風会の話もされ、その為に沖縄を一度訪問したいとの事であった。渋沢敬三先生が初代会長であったのか先生の話も出たので私が先生にも御交誼をいただいている事を話したら妃殿下はうなづきその事も承知している様な風だった。とにかく皇室の方々殆どが沖縄を代表する私の労をねぎらい同情し今後の励しの御気持が充分察しがついた。殊に印象的だったのは美智子妃が家内に私の身体を大事にしてあげて下さいとの事を仰言った事。秩父宮妃が大変だったでしょうと同情の言葉をかけられた事。御二人華族とは云え庶民の御出身であつての事かと思つた。

円遊会の焦点は私にあてられた感じ。森戸先生をはじめ五名の名士が御言葉をかけられる幣席でならんで居たが、NHKは私のみには懐中マイクをつけさせてあつたから。私にとってはこれで二回目の円遊会であつたが二回御声をかけられる代表的存在になり写真班の砲列の焦点にもなつた。テレビやラジオ、新聞の種子ともなつた。やはり沖縄への関心と云うものか。その後には首相御夫妻にも会つた。にこやかに親近感に充ちた首相の態度であつた。晩は御贈りした記念品の御礼を御夫人から直接にのべて下さつた事には恐縮した。その後には山中大臣夫妻に会い長話をしてこれ又印象的であつた。森戸先生夫婦にも久し振りに会つた。木村企画庁長官夫婦にも久し振りにあつた。奥様から差し上げて宝物箱を重

---

<sup>63</sup> 森戸辰男（1888-1984）。学者、政治家。東大助教授時代に論文「クロボトキンの社会思想の研究」が危険思想とされ朝憲紊乱罪により有罪、大学を追われた。戦後は片山、芦田内閣で文相を務める。

宝しているという御あいさつであった。その他多くの方に会ったが省略する。〔略〕  
歴史的の一日は終る。

6月26日(月)晴 〔県知事選当選〕

〔略〕最後にはヤラ二五一、二三〇。大田さん一七七、七八〇。その差七三、四五〇。投票率七六、二八%。主席戦の時より低し。夕方頃までに県会議員殆ど当選決定。革新側は異常な進出。二三名当選す。これも沖縄本土政治史上はじめての成就である。沖縄県民ここにありとその健在さを示す結果である。

五時頃から戦勝当選祝賀会大レセプション開催。六〇〇名位→一〇〇〇名へ。此の度の選挙は完勝と見てよい。圧勝！圧勝！

夜子供等孫等全員集まり祝賀パーティー。かくて沖縄にかつてない二大選挙に連戦連勝二回の記録をつくる。沖縄全域で行われる主席選挙で勝ち、復帰を実現させ、今度は沖縄県はじめての知事選に当選。而も県出身としても有史以来はじめてである。歴史上の仕事は次次とやっけて来た。主席当選、祖国復帰、知事当選！

家内も新島さんも元気で私のみのまわりの世話を心細かにやってくれた。有がたい。その他私の力となってくれた世話人の方々に感謝多謝。子供等の心配にも感謝。歴史的の一日かくして結果が出て終る。六月廿六日この日！

7月1日(土)晴 〔佐藤総理と最後の会見〕

朝、方々に電話してあいさつする。一〇、三〇佐藤総理に会う。二十五分間、総理は喜んで会って下さる。

今日までの労を謝し、殊に復帰実現の件感謝する。この前にあげたかざり盆は総理室にかざられていた。基地問題等整理縮少<sup>マア</sup>の方々の姿勢は出来たが具体的な目途は立て得ず心残りだと云われた。物価問題についても心配の程、質して居た。未だ安定しないので安定させるべく県で出来る事はやる、国にしてもらわねばならぬ事は御願いたい、復帰処理事項は次期内閣に解決方是非引きついでもらいたいと申し出た。承知の旨答えられて居た。山中長官の努力業績も非常に賞讃、感謝の意を表しておいた。大田氏との戦いは気が楽だったろうとも話して居られた。約三十分程話して辞する。二人で握手して話し合っている所を報道人<sup>マア</sup>は写真をとって居た。いつもとは違って私は秘書官室で待機していた。いつもとは様子が異なっていた。総理としてはこれが最後だ。〔略〕

7月13日(木)晴 〔田中内閣会談〕

九時四〇分 岡部開発庁次官に会見。続いて政務次官中津井真氏に照会を受く。この方は広島第二臨教の出身とかで尚志会員。十時から本名武総務長官に両次官立ち合いで会見。

長官就任を祝し今後の協力を要請し具体的に復帰処理事項を列挙してその解決方要望す。快く協力を約さる。

只一つ、執行の出来る事からやる事が大事、出来ない事のみ主張しても致し方ない、県民の要望尊重する、嘉手納別個視察、その時に北海道開発庁の事を話し沖縄も開発庁を設置したらと発言したと。

一〇、三五 木村建設大臣。

土木、建設部門の重大さにかんがみ建設省の協力の重要性をのべ協力を求める。全部 OK。万博関連道路、高速度道路の要望に対し必ずやると約束し直ちに事務次官に電話し、やると返事をせよと強く支持さる。余り気前がよ過ぎてびっくり。沖縄問題何でも云って来いと激励を受ける。極めて積極的好意的に驚く。

又こうも云われた。今まで政治が官僚に支配されていた。政治が官僚を支配しなければいけないと。

十一時頃官房長官に会いに行ったが組合の方々と会っていた為、会見を午後にまわし帰ろうとしてると十一時二五分に田中総理が会って下さるとの事。応接室ではじめて握手。しばらく着席。間もなく入室し懇談する。茂波氏糸洲氏もは入る。復帰処理の件、B52の件、万博道路の件皆 OK。後に記者会見。十一時四五分自治大臣福田一氏会見、琉政の時参事官手鹿氏が秘書。協力 OK、その他いろいろ話す。

一応事務所に帰り古田氏来訪後大浜先生も来訪。今日は諸大臣の会見の結果、特に万博関連道路、高速度道路に建設大臣が積極的だった事報告。私がお会った直後、大浜先生も会って同様の事を聞かれたとの事。一時半大平外務大臣に会見。橋参事官も立ち会う。今後の協力 OK。B52の飛来についても早速大使館側を呼んで撤去を申し出でをしたとの事。今後飛来せぬ様対米交渉要請 OK。

しかし今後低気圧襲来の時又飛来する事が起きるかも知れないと頼りない事も云っていた。かくては本土並基地にも反し国民も承知すまいと念を押す。OK。交渉の結果は文書で報告の事。OK。

三、四〇 通産大臣中曽根氏。高速度道路推進を強く閣議で発言すると約束する。但し土地の入手は知事が責任をもつかと念を押す。了解する。

四、三〇 経企庁長官、木村前長官と御目にかかる。

四、五〇分 二階堂官房長官に表敬。今後の協力 OK。終って日程を終り、事務所に帰りタイムス、琉球記者会見。日本アルミ専務と会う。早くアルミ工場調査団派遣要請があった。

後で二階の食堂で夕食をとって帰る。瀬長氏から十五日共産党主催のレセプションに出席のさそいあり。辞退する。今日は早く帰って休む。

7月31日(月)雨

〔略〕今日、朝日、タイムスの与論調査発表さる。復帰の評価、復帰後の基地や生活からの不安、将来の展望等、経済開発、万博与論等。大体予想される内容の与論が出た。意外の答えはない様であった。政党支持も順当。革新支持がのびたみたい。屋良支持は七三%。

これは全く圧倒的らしい。選挙直後とは云え県民の良識に感謝し拝み度い位だ。いよいよ決意を新たにして頑張らねば。タイムスの波平君の話によると連続当選しても二回目は下るのが普通でこんなに高率が出るのは異例のケースと云う事だ。〔略〕